

目 次

卒業生諸君へ ..... 天野学部長 2

特集：門前の小坊主，宇宙を語れ ..... 編集部 3

    編集部座談会

    教官アンケート ..... 順不同 9

研究室紹介 ..... 順不同 14

退官のことば ..... 順不同 17

沼田研修 ..... 編集部 23

小特集 なんでやねん？ あっ総科 ..... 編集部 25

街の総科 ..... 編集部 28

飛翔箱 ..... 29

学部の記録 ..... 37

就職状況 ..... 38

卒業・修了論文題目 ..... 39

信頼に足る若者たち—わが学部の就職状況— ..... 就職委員長 46

これが編集後記だ!! ..... 47

# 卒業生諸君へ

卒業おめでとう。

諸君は人生の一時期4年間を大学生として過した現在希望に満ちた将来に胸をふくらませていることと思う。心から御祝の言葉を述べたい。

昨年広島大学で行われた学生の意識調査の中で、自分の所属している学部 of 学生となったことに満足しているかとの設問に対して最も高い満足度を示していたのは我が学部、総合科学部の学生であった。此の結果をみた時に評議員の先生と共に大変嬉しく思い喜んだものである。時間がたつにつれて、総合科学部の学生が満足しているのは何に満足しているのであろうか、どんな気持ちで入学し、その時の希望が叶えられているのであろうかとの疑問が湧いて来た。どんな気持ちで入学したのだろうか。文系理系どちらでも受験が出来て、一年間の間に将来の進路を決められることを望んでいた学生も確かに毎年居る。しかし多くの学生は何かこれを勉強したいと考えているものをすでに持って入学している。約200名の学生の希望する分野は哲学・美学から地学・天文学まで非常に幅広い殆ど全ての分野にわたっている。4年間色々な勉強をして来たわけだが、最後の卒業研究で初めて学問の奥深さ、すばらしさの一端を知り得たに過ぎないと自覚していることと思う。総合科学部創設の理念の一つ裾野の広い教育研究を行う学部との長所を身につけて将来に活用してもらいたい。

「初心忘るべからず」との言葉は聞いたことがあるだろう。これは演劇人である世阿弥の伝書「花鏡」にある言葉で、初めて事に当たった時の、あの新鮮で決意に満ちた感激を忘れてはいけぬ。このように聞かされているが実は芸事を始めた時には自分がかに未熟であるかをよく自覚出来るものである。この初心者の未熟であったことをいつまでも自覚し、精進努力せよとの意味が込められた言葉のようである。

今から諸君は社会に出て色々な分野で活躍して行くわけであるが、上述した気持ちで自分の未熟さを常に自覚し一日一日を大切に生活してもらいたい。

総合科学部長  
天野 實



昨年夏に大学審議会の中間報告が出されて大学における一般教育が問題になっているが、総合科学部は学際的学部で教育研究を行っており、まさに時代を先取りした理念にもとづき設立されたものである。国際社会が現在ほどはげしく動いている時代は過去になかったと言えよう。このような時代に対応して活躍出来る人間は個別科学の枠組ではとらえきれない社会的課題に立向う素質の持主である必要がある。総合科学部4年間の間に受けた教育は各専門分野の協力による幅広い薫陶であったはずだ。学部の理念の開花のために色々な考え努力している先生方の姿を見て必ず何かを獲得したことであろう。

次に総合科学部の学生としてのみ得られたもう一つのことを大切にしてもらいたい。それは専門分野の異なる同僚、友人のことである。クラブ活動等を通じて知り合った友達も多く出来たことであろうが、同じ学部の学生としての友達は又格別のものである。「安芸の国」を一緒に歌い、スクラムを組んで延々と躍ったファイヤーストームの思い出は一生忘れられないことだろう。持つべきものは真の友人だ。感性豊かな青春時代を共に過し、人生を語り合った信頼し得る友人程有難いものはない。今から社会に出て色々な困難に出会うこともあるだろうが、その時こそ相談に乗ってくれるのは友人なのだ。何年たっても若い学生時代にもどって真剣に相手の身になって考え、共に悩んでくれるものだ。友達を是非大切にしてもらいたい。

広島大学総合科学部に入学してから毎年色々な出来事が起っている。楽しいこと悲しいこと、一つ一つが昨日の事のように思い出されることだろう。同僚である友人と共に教官の顔、期末試験の結果を手渡してくれた事務職員の顔も思い出されることだろう。どうか機会ある度に総合科学部を訪れて、近況を知らせて下さい。

呉々も体に気をつけて元気一杯頑張ってください。  
世界に羽搏け総科卒業生！

# 門前の小坊主，宇宙を語れ

## ～学際性とはなにか～

前号での取材～各コースと、それに似たようなことをやっていそうな他学部との比較～は全く無意味であった。「他学部によせあつめが総合科学部である」という暗黙の前提があったからである。あたりまえのようだが、総合科学部は総合科学部である。

“学際性”を考える場合、この前提は捨てなければいけない。「いろんなコースが一つの学部内にあって、いろんな授業がとれる。問題はない」と人は言う。しかし、それは学際性ではないのだ。あえて某友人の言葉を借りて言うなら、それは「ござとへん」のとれた“学祭性”なのだ。半期が終了した頃には“祭のあとのさびしさ”のみが残るのだ。

絵の具に例えて言うなら、総合科学部には実に様々な色がそろっている。小学校の図画工作の時間、のどから手が出るほど欲しかったあの24色セット以上だ。ビリジアンも、やまぶき色もあるのだ。どんな絵を描くのかは、もちろん自分で決めなければならない。どこにどんな色を使うのかも、自分で決めなければならない。しかし、どの色とどの色を混ぜたら、どんな色になるのか。これは極めてむずかしい。あれでもない、これでもないと色を足していくうちに、自分の欲しかった色とはまったくかけはなれた色になってしまったりもする。

要するに「方法論を提示し得ないくせに，“従来の学問領域を越えた学際性研究”を看板にかかげるな」ということである。

“従来の学問領域を越えた学際性研究”とは素晴らしい看板である。“現実の問題に答える学問を”という時代の必然的帰結であり、高潔な意志をもった看板である。確かに、社会科学・自然科学両者の発展は驚くべき成果を人類にもたらした。しかし、この未曾有の繁栄の裏側には、未曾有の危機がある。核戦争、環境破壊、貧富の差の拡大、人口問題……いちいちあげるのも馬鹿らしいほどの山積みの問題に、どう答えるというのか。学問の、また人類の進歩を否定する気はさらさらない。だが、このままでいいわけがない。まさに、“従来の学問領域を越えた学際性研究”が必要とされているのである。

極論してしまえば、総合科学部にコース分けはいらない。専門性はいらぬ、という意味ではない。

専門性のない学問を、物事のうわっつらだけをなでるような学問をしていけば、ただの「知識人」「ものしり」である。総合科学部に必要な専門性とは、「なにをするのか」である。「過疎をなくす」でも「新しいエネルギー資源を考える」でも何でもいい。少なくとも「経済学をやる」とか「物理学をやる」とかではない。

では、コースをなくせばすぐに理想の総合科学部が生まれ、学際性がうちたてられるかというところではない。我々は現実、今ここにある状態から物事を考えなくてはならない。で、今できることはと言えば、各コース間の交流をはかたり（今回の座談会の後半部はその模索とも言える）、コース内での交流をはかたり、役に立たない決まりごとを改善したり、施設を充実させたり……という土壌づくりである。西川きよしではないけれど、“細かいこと、小さいことからコツコツと”やらなければならないのだ。明確な意志をもった自発的な行為にこそ、創造性は宿る。それを鼻で笑うやからは、自らが人間性を否定していることに気付きもしないだろう。

（文責・竹内憲司）

前号の特集“学際性を再検証する”は、様々な反響を引き起こした。今回は、座談会形式で学生の忌憚のない意見を出してみた。

#### 参加者

- A：地域文化コース3年
- B：地域文化コース3年
- C：地域文化コース3年
- D：社会科学コース3年
- E：社会科学コース3年
- F：社会科学コース3年
- G：社会科学コース3年
- H：自然環境研究コース3年
- I：自然環境研究コース3年
- J：生体行動科学コース3年
- K：生体行動科学コース2年
- L：社会科学コース2年
- M：1年
- N：1年

#### 趣旨

◇総合科学部において、学際的な研究活動が行われているのか？

◇それに対する学生の心構えはどうか？

(5分経過)

- D：総合科学部では自由放任であることです。自分の興味に応じた研究ができるが、それだけ勉強せねばならない。
- E：学際性を論じ、問題を考える意識が低すぎる。総合科学部の存在意義についての認識が低い(総合科学の構成員すべて)。カリキュラムどうこうといった細かい事を言っても仕方がない。教官側だけに責任転嫁してもだめ、学生がやらねば。たこつぼ化、専門領域にはまり過ぎている。動脈硬化の状態だ。
- A：学際性を外の人がどう意識しているのかは分からない。
- B：総合科学部の方が柔軟性がある。

#### 学際性を追及するには

(15分経過)

- J：ちょっと、言っておきたい。大学のシステムについては変更できない部分がある。どこまで飛翔委員が変えていけるのか分からない。ふつうまず自分の専門分野しかできない。広く浅くがいかに難しいか。総合科学部のシステムがこうだからと言って確実に広く浅くできるかという訳ではない。他のコースを理解するのは本人次第。
- H：総合科学部は視野を広めるためのカリキュラムが用意されていると思うが、いわゆる専門教育を受けた教官が集まってこの学部が構成されているため、専門的にならざるを得ないと思う。視野を広めていくのは個人の責任において学生が成し遂げなければいけないと思う。しかし授業でそれを達成しようとするならば、自分の専門分野をとると他のものがとれないのが実情だと思う。
- I：自然環境はかなり分野が広くて、3年までは全部についてこなさなければならぬので、どうしても他の分野まで手が伸ばせないし、1つの分野を深く、というのも難しい。僕は理学部のように理論を教えてもらっているのではなく、ものの捕え方を教わっているのだと思っている。そういう中での実験というのはものを捕えるための手段なのだ。同じものでも学問分野によって捕え方が違う総合科学部の理念のひとつは、いろんな方面からものを考えられる人を育成することだと思う。「意識」の問題について言うと、人によって様々な考え方があり、コース内ではいろんなレベルの意見や情報を交換する場ができています。しかし結局は教官や先輩、友人などの関係を通して自分で理念を形成するしかないと思う。そういう人間関係がコース内に限られてしまっている。
- K：なぜ総合科学部に来たかと言えば、やりたいたことが決まっていなかったということと、なんとなくおもしろそうということだった。2年になる時、「これだっ」というのが見つからず今で

も本当に自分のしたいことはこれなんだろうかと考える。考えずになんとなくコースを決めた人と、入学当初から意識している他学部の人とは意識が違うのでは。総合科学部は結局何をやったのかははっきりしにくい。しかし個人的には総合科学部に来てよかったと思っている。でも、入学前から「これを極めたい」と思っていたら他学部のほうが良いのでは。

- F: 俺はただ広島に来たかった。だから総合科学部には無の状態に入って来た。だが最近、確信したのは政治学をやるにしても法律・経済・文化を知らねばならないってことだ。あらゆることに興味がないとだめだ。それがすべてにつながる。今、自分がやっているのは学問のための学問ではないのかと悩んでいる。遠いソ連の民族問題をやっているが、それがどう自分に拘わって来るのかが分からない。しかし世界的視野に立てばエスニックなものが存在するのは当然で、紛争が起こるのも自然である。日本が例外なのだ。だから無意味ではなくて、自分の問題として考えなければならないのだ。総合科学部に置かれた状況のなかでポジティブに進んで行けば良いのだ。問題意識があるなら自分で解決して行けば良い。
- G: 俺は地球を守るために勉強している。それには専門分野もそれに関連する分野もやらねばならない。しかし、社会の変化に対してコースが変わっていない。個人の学際以上に集団の学際を作ってはいけないものか。

## 総合科学部は

### “既成の学問に対する挑戦の場”

(25分経過)

- D: だから総合科学部の構成員はみな挑戦の姿勢をもたねばならないのです。学際性なんてどうでもいい、なんてことをいうヤツがいてはいけないんだ。
- J: しかしみんながそういう志をもつ必要はないんじゃないか。
- D: 総合科学部をただの職場や通過点としかとらえていない人がいるけれど、それは大きな間違いで、これからの複雑な世界の中では学際性を考えない人間はろくな仕事ができないのじゃないか。
- J: では学際性とは何なのか。ここの学部だけが

学際、学際と言っても仕方がない。

- F: 学際性という視点が必要なのか。
- D: 単位をバンバン落とす遊び人がいたり、「もう俺は縄文土器に恋してしまったのだから、ほかの本なんて読まない」なんて人がいても楽しいと思うのだけれど、少なくとも総合科学部の人間ならさっきの“挑戦の姿勢”をもたないと。
- H: 水平思考・垂直思考で言うならば、自分の専門に関しては垂直思考という核をもちつつ、水平思考ができるようになることが総合科学部のあるべき姿だと思う。勉強するのは自分、すべてを大学に求めてはいけない。
- F: つくられた当初からコース改編が行われて来たけれど、そういった制度の学際性と、学生が求める学際性とは分けて考えないと。
- B: 制度は理想にすぎないわけ？制度は大事だとおもうけど。
- F: 理想は到達点ではない。自分達が制度としてではなく個人レベルで考えるべきだ。
- D: 学際性とは決して“広く浅く”ではないのだ。個人のレベルでは1つのテーマに突進すべきだし、そうしないものにはならない。けども、あくまで“挑戦の姿勢”は崩さずに、つまり学際性を支える柱なのだという意識が不可欠なのだ。総合科学部はそのような人材の養成機関なんだなと思っているんです。
- J: なんでそこまで学部縛られなければならないの？ひとつのものを分析する武器が学問であるなら、武器が豊富に用意されていることがすなわち「学際性」で、新しい武器を使ってもいいし、勿論旧来の武器を使う人がいても一向に構わないと思うけど。
- D: 僕はおおいに総合科学部という看板にこだわりたい。少し前まで他の国立大でも総合科学部を作る動きがあるなんてことがマスコミに盛んに書き立てられていたけれど、いまはそんなことは聞かない。これは広島大の総合科学部がうまくいっていないからだなんていう悪口があるんだ。
- F: 学際性とは“まちづくり”のようなもので、そこには様々なものが必要になる。それがタテヨコに連携して1つの社会になるんだ。総合科学部に欠けているものは学生間の交流。たとえば卒論でもコースを越えた共同研究があってもいい。

- C: 共同研究はできるそう。それは個人単位で評価される。現実には各自の興味がバラバラであるからなされたことはない。共同研究についての具体的なシステム（評価・発表の仕方、担当教官など）は決まっていない。
- A: 教官側では学部を越えた研究プロジェクトはあるけれど、学生の卒論レベルとは少し違う。（卒論でなく）全体のプロジェクトとしてひとつの問題を様々な方向からアプローチする試みがあればおもしろい。
- F: そういうことを認めるように制度が変われば良い。
- B: 地域文化7群では、人類学、開発経済、両方の視点で卒論を書くことは可能。でも、そういうことができる環境が総合科学部にはあんまりできていないような気がする。
- D: 学生がそれを求めないとなかなか変わらないだろうな。そういうアピールをするなら学生は意識改革してもっと勉強しないと、枠を超えた研究をするにはそれだけ実力がなくてできないしね。コースによっては卒論の発表会その他コースの学生の傍聴を認めないところもあるらしいし。まあ、他の人が聞いてもわかんないし、わざわざ来る物好きもいない。
- J: 卒論発表やセミナーや専門授業でも、ある程度のレベルに達してないと参加できない。
- F: ゼミに縛られている傾向があるが、個人のレベルをこえて協力して行けば良い。
- J: 3年後半になると、もう他の分野のレベルにはついて行けない。もうこれは当然だろう。
- F: しかしテーマによっては他の関連のものもきくと生かせるはずだ。例えば、日本とアメリカの地域社会の比較研究など。ただ、そういう場合、“共同”研究の成果は評価してもらえるのかという疑問がある。
- H: 自然環境と社会科学の学生が共同で研究、論文を書きたいということになった場合、それは可能なのか、可能ならどこで発表することになるのか。
- D: 前例がないのだろうが、仮にそういった画期的な人を認める柔軟性はあるのか。
- J: でも現実に制度的な枠で困っている人がいるのか？ 実感のないことをこういう場で議論するのはどうか。
- E: 困ってなかったらこのままで良いのか、より

良い状態に向上させなくては。



### 学生の学際的な 研究は幻みたいだ

(50分経過)

- H: じゃあ、なんで総合科学部が作られたの。
- E: 日本の学問を新たにとらえなおすため総合科学部がつくられたのだ。だから社会の変化に対応してコースはどんどん変わるべきなのに変わっていない。
- G: 専門の必修単位が多すぎる。だいたいゼミに1単位しかないのは不合理。単位の制約があるためやりたいことができない。
- J: 4年で効率良く卒業しようと思ったらやむを得ないのではないか。
- G: しかしいらんとこにパワーは使いたくない。やりたいことにパワーを使わなければならん。学際性を自分なりに追及するときこここのところがネックになっている。（単位数が多すぎる、一般教養と専門が同レベル）
- B: もともとゼミってのは1単位なんだよ。地域の演習が2単位なのが変わなんだよ。
- A: 演習が1単位で、講義が2単位なのは講義の方が予習の量が多いはずだからなのだよ。
- G: なっ、なにっ！
- J: ほんとうに予習すれば2単位なんだ。きまりでは。
- G: だからいらんものまで数をあわせるためにとらんとあかん。
- F: 単位をとることにふりまわされて自分のやりたいことができない。
- D: 他コースの人間が単位のために受講すると、その講義のレベルが下がってしまうことはないのかしら。
- F: カリキュラムを決めるのは上の機関だけれど、学生の側から意見してもいいんじゃないか。

D: だから効果的な飛翔の誌上でやってるんだ。

## 究極の総合科学部

(90分経過)

D: と題して議論しましょう。夢物語でもいいぞ!  
夢はでっかいほうがいいのだ。



J: 勉強したいひとはとことんやる。したくないひとは早く卒業すればいい。

E: エントロピー増大の果て、もはやコース分けはいらんと思う。現実はどう対処していこうかについての問題意識のある人のみがくれればよい。だから年によっては入学定員を割ってもいい。だから1年間のコース決定の猶予期間はいらない。それなりの考えをもった人が総合科学部に来なければならぬのだ。

J: 1年かかって振り落とすっていうのは?

H: 最初、総合科学部には自分のやりたい分野がないとおもっていた。が、1年間じっくり考えて自然環境に入ったのはよかった。

D: だから、彼のように猶予期間に見極めをきちっとした1年を過ごす意味では良いと思うのだ。でもえてしてマークシート世代のノンポリ学生はのはほとんど過ごしている。よくガイダンスや学部紹介で、総合科学部ではあわてて自分の専門分野を決めなくても良いことがセールスポイントになっているが、これは高度な“学際性”の理念とは矛盾している。

J: 理系にとっては、猶予期間であるはずの1年次に必要な科目があって、猶予期間にはなっていない。

B: 方向が決まっている人は1年から専門をやれる制度になったらいい。

G: でもやりたいことがあってもはっきり決められない場合も有り得るから1年の猶予期間はあった方がよい。

D: それはそうだけど、その大事な見極めの期間

をばやーと過ごす勘違い学生もいるのは事実。学生も指導する教官もそれぞれプロ意識をもつべきでしょう。

F: けれど全ての授業に対して力を入れるのは無理じゃないか。

D: 気持ちのうえでは100%の力をださねば。甘えていてはだめだ。しかしこういうことを言い切るには相当の覚悟がいる訳で…。さっき単位数が多すぎるから減らせという話が出たけれど、その分遊ぶんじゃないかと必ずいわれるだろう。それを言わせないためには100%やっているという自信、学生のプロ意識があるかどうかだ。

F: ある授業で、試験時のノート持ち込みを禁じたら、ノンポリ学生がガタッと減った。そのほうがやる気に満ちた講義になると思う。学生もそういう活気ある講義にアプローチして行くべきだ。

D: ばやばやしていると気まずくなるような、刺激に満ちた“凄み”が総合科学部にはいいな。

F: アメリカ式に学生が講義に逆評定するとか。でも楽勝科目情報に目の色を変える学生の土壌では無理だなあ。

B: 新入生に対して総合科学部のカリキュラムの説明が不足している。先まで見通せるものが必要。3年になって気付いても遅い。

F: そういう制度の改革を進める一方で、先輩が教えるというタテの交流がないんじゃないか。みんなそういうことに冷めている。

D: 情報交換はもう個人にまかせきりになっているのが現状だなあ。だからもっと組織的な勉強会や“飛翔”がそういう場であるべきだろう。学生の自発的なグループができていけばと思う。

E: 今の社会科学コースの勉強会は大学に対するカウンターパンチだ。

H: 自然環境でも情報交換の場としているいろいろ試みられているけれど、結局、学生が中心にならなければ人は集まらない。せっきゃく飛翔という媒体があるのだから、はっきりと勉強会などの日程・内容・場所・時間などを紹介すれば良いのではないか。

K: また、分野を越えた勉強会ができて良いと思う。

H: 学生レベルの話なら専門外の人でも興味に応じて参加しやすいのではないかな。

F: 専門を越えた集まりも刺激に満ちて良いかも

知れない。 語学総合部の研究

H: 自然環境コースのセミナーは専門研究の場であるので、一般教養レベルの会ももちたい。分かり易く、話しやすい会を。

J: コースごとの情報が分かるように、みんなの興味ある話題をしゃべる場があったらいい。

E: コース分けが弊害になっている気がする。インフォーマルな勉強会だけでなく、講義の延長のようなものもあって良い。

J: 人数が増えると大変だなあ。教官を呼んで話題をリクエストするとか。

A: 飛翔を媒体としてもっと活用して、情報誌的にする。各コース毎に発表会をする。

D: あっちこっちで活動の輪がポコポコできていけば総合科学部も活性化するな。



座談会時間：180分 おつかれさまでした。

書記・岡村美穂

構成・中家伸之





## 特集 教官アンケート

前回の特集「学際性を再検証する」はあくまで学生の立場からのものでした。そこで、見落としした点や誤解がなかったかどうかの点検と、先生方の学際性についての考えを知るという目的で、

1. 39号特集についての感想、批判、意見がありましたらお願いします。
2. 自コースで、学際性を念頭においたカリキュラムが為されていると思われますか？
3. 自コースでの学際性の理念と現実について、考えるところをお書き下さい。

という3つの項目からなるアンケートに、コースの先生にお答えしていただきました。前回の特集、今回の特集である座談会と関連づけて読んでみて下さい。

### 自然環境研究コース

飛翔39号の特集「学際性を再検証する」でコース外から見た自然環境研究コースの学部教育についてのコメントがあり、なかなか刺激的で面白かったが若干誤解もあるように思ったのでコース内からの1意見を若干述べたい。

まずはじめに、この筆者は自然環境学なる学問分野があってこのコースでその体系を学べるようなイメージを持っているようだが、そこらへんからピントがずれ始めているようなのでこの点について一言。私の理解では、自然環境学というのはまだとても出来上がった分野ではないし、おそらくそれが含む内容の広さから考えても十人十様の内容が考えられ、とても従来の物理学、動物学…のような学問体系が成り立つものとは思えない。自然環境研究コースは文字どおり自然環境の多様な側面を研究するコースで、そのためには従来の学問体系（これは研究手法で規定される）の枠をこえて多様な手法で対象に立ち向かう必要があるという考えが背景にある。この点で、総合科学部でも最も総合科学らしいコースの一つであろう（学際そのもの）。従ってカリキュラムも、“従来の専門”意識のない、必要とあらばどのような分析手法も抵抗なく自分のものにすることができる人間を育てること——どのコースもそうした面があるでしょうが——に1つのねらいがあるように思う。理学部のような講座制は、学問体系に従って各講座がありまたそれに従ったカリキュラムがあり学問体系の維持にたいへん貢献しているが、新たな分野への展開や革新的な考えをする人間を許容しにくい傾向がある——優れた研究者はそのようなことは少ないが多くの凡庸な研究者は自己保身から無意識のうちにそうなる例が多い——。総合科学部は先人の卓見から大講座制をとり研究体制のフレキシビリティがあるので広い視野を我が物とする人間が育つ土壌をもっている。

カリキュラムに関して具体的に指摘のあった2、3の点について。実験・実習が理学部と比べて少なく、講義との有機的連携が乏しいとの指摘については、理学部の便覧を見ると学科によって実験時間数は大幅に異なり一概に時間数が少ないとは言えない。生物や地学は理学部が実験時間が多いが、その分3年生から専門に集中しているということで、総科は3年次ではまだ自然環境研究の入門段階であると見る事ができる。講義と実験が連携するのは望ましいが今のカリキュラムではそのように配置するのはなかなか容易ではないようである。一方、自然環境コースには環境科学野外実習というプログラムがあり、例えばその一つの大山実習では植生・地形・気象・水文・火山・砂防等、多様な現象が大山を巡って有機的に連関する様を実習することができる。

セミナー（環境科学演習）は2・3年次から研究の最先端の雰囲気味わってもらおうという何人かの教官の考えから行われており、難しくついていけない学生がいるとしてもその可否は容易には問えない。個人的には週1時間位そのようなものがあるのは悪くないと思う。ただセミナーとしては活発な討論が行われるのが望ましく、現状が必ずしもそうっていない点をコースおよび担当委員で検討しているところだ。

「自然環境学方法論」に関しては上に述べた通りで、コースの各々の授業で各々の自然環境学の方法論が述べられると理解してもらったほうが良いと思う。以前それが存在していたとの点については、実際は社会科学コースの先生にお願いしてそのようなものを開講していたが、一般論としてそのような講義があってもコースの中で実際に研究の新しい領域を拓いていく現場と一体になるのは困難でそのようなものがあったりあまり学生の人に参考になるとは思えない。自然環境研究はまだジャングルの中に道をつけているようなも

ので、個々の研究者が各々の経験を元に新たな手法を身に付けながら新たな展望を求めて道を切り開く努力をしている。

(佐藤博明)

## 生体行動科学コース

11月13日付けで申し入れのあった「アンケート」について、お答えします。なお、以下の意見は私の個人的なもので、コースの教官の意見を代表しているわけではありません。

### 1. 前号特集についての御感想、御批判、御意見がありましたらお願いします。

\*大学審議会における答申が来年3月にも出されようとしている今、「特集：学際性を再検証する」は私にとってはタイムリーな企画でした。というのは、総合科学部の在り方こそ、大学教育における一般教育と専門教育の在り方、あるいは専門教育の在り方を考える上で、重要な鍵を握っていると思うからである。

\*ただ、以下で述べるように、「学際性」の検証はその尺度をどうするかで評価が異なり、難しい問題を含んでいると思います。

\*なお、「街の総科——段原再開発事業についてしみじみと考える！」は、非常に興味深く読みました。

### 2. 自コースで、学際性を念頭においたカリキュラムが為されていると思われませんか？また、自コースでの学際性の理念と現実について考えるところをお書き下さい。

\*第39号の「生体行動コースは、夜明けに涙を流す」では、「生体行動科学コースは、行動科学、健康科学、生命科学を主とするものというように、コース内で3つの専攻に分かれている。ここでは、行動科学専攻に焦点を当て、教育学部心理学科との比較により、その特色や問題点を考えていってみたいと思う」と述べられている。「学際性」を「いくつかの異なる学問分野がかかわるさま」（広辞苑）と理解するならば、問題はこの「関わり方」にある。これを一つの研究対象に様々な学問分野が「関わる」と解するならば、生体行動科学コースは必ずしも「学際的」であるとは言えない。というのは、コースで問題となる研究対象は「生命」「行動」「健康」の3つに及んでいる。しかも、各々の専攻がそれなりにまとまりのあるカリキュラムを構成している。この意味では、我がコースは「学際性を念頭においてカリキュラムが為されている」とは言えない。しかし、一つのコース（あるいは学部）で様々な学問分野の授業が行われていることを「学際的」と言うならば、まさに我がコース（あるいは学部）は「学際的」である。

\*「学際性」の理念を上述の「一つの研究対象に様々な学問分野が関わる」と理解するならば、学問の細分化と専門化が進んだ今、研究における問題の設定の仕方に関して発想の転換が必要であろう。しかし、そうして設定した問題を具体的な授業科目として体系的に提示するとなると、非常な困難を伴う。というのは、そもそも焦点となる問題の設定の時点で、合意が得られるかどうか分からないからである。

\*「学際性」の理念に関して合意が得られたとしても、具体的な実施に関しては多くの困難な問題があると思われる。

(楠戸一彦)

## 物質生命科学コース

### 1. 39号特集についての感想

総合科学部に来たのだから、是非特徴ある学問を学びたいという学生の皆さんの意欲が全体に漲っていて、大変興味深く読めた。こうした議論が展開されることによって、充実していた総合科学部のカリキュラムが益々深められていくだろう。教育・研究内容に対する学生の皆さんのこのような真剣な検討は、今後の強力な勉学意欲に発展して行くものであり、将来的な発展に向けて取り上げられて行かねばならない。

また物質生命科学コースの内容は、レポーターに大変よく理解されてまとめられている。

### 2. 学際性を念頭においたカリキュラム

カリキュラムについては、広島大学総合科学部「学生便覧」に記してある。そのなかで、物質生命科学コー

スで考え得る主な3つの進路の例について、カリキュラムが示してある。3つの進路の例としては、

- a. 物質の構造と性質およびそれを支配する基本法則について学ぶもの
- b. 生命体の構造と機能およびその発現と調節について学ぶもの
- c. 新しい機能を持つ物質の探究と応用について学ぶもの

が挙げられている。総合科学部で開講されている様々な講義を幅広く利用すると、もっと多彩な進路も考え得るだろう。

さて“学際性”とはどのようなことか、人によってその理解は微妙に多少異なることもあるだろう。ここでは理系に限って考えることにし、例えば旧来の理学関係の学問分野の分類分けである数学、物理学、化学、生物学、地学等の専門分野のいくつかを跨ぐあるいは貫くような教育研究を“学際的”と呼んでおこう。

そうすると、「物質の研究」にはまず性質を理解するための物理学や、物質を作るための化学は欠かせないし、理論的基礎づけには数学は欠かせない。数十億年にわたって様々な物質を育ててきた地球は、思いがけない新しい発見をさせてくれる物質科学の宝庫であり、地学も大切な分野である。さらに物質の応用的な機能に着目すると、生物の持つ機能はお手本であり、“生物に学ぶ”は機能物質開発の鉄則の1つでもあり、生物学からも目がはなせない。さらにもっと実用的な側面に着目して、自分の研究分野の選択に今後社会的ニーズが増しそうな物質を取り上げようと思えば、企業活動や経済動向など社会科学的なことにも目を配らなければならない。必要なものは実に多く学際的である。こんなに沢山のことは、無論一般教育や専門教育をフル動員しても、必要に違いないが、講義というカリキュラムのなかで修得する余裕はない。骨格を損ねることなく可能な限り幅広くと配慮した立場で、現実可能な必要不可欠最小限を示したのが「学生便覧」にしめしてあるカリキュラムと見てよいだろう。

「生命の研究」についても同じようなことがいえる。生物学と化学はまず根幹だが、近年の生命科学における物理学的手法の重要性は益々増大している。生命の特徴づけるある機能の発現機構を掘り下げて行くと、必ずその機能を担う分子レベルの物質に行き当たるという考えもある。そこには物質科学のテーマとしても考え得る「生体物質」の研究分野が広がって行く。さらにミクロなレベルでは、生命物質も物理学と化学の法則によって理解されるものであり、生命科学と物質科学は融合領域を共有する。「生命科学」にとっても、出来るだけ多くの分野の知識が学際的に学び取られていることが望ましい。しかし制限された期間内のカリキュラムとしては、やはり必要不可欠なことを絞って「学生便覧」にあげることになる。

「学生便覧」に書かれているカリキュラムはあくまでも例であり、幅広い講義が展開されている総合科学部の利点を生かし、“自分のカリキュラム”を試みても出来るだろう。実際、これまで4年になって卒業研究で我々の研究室に来た皆さんの修得科目の一覧でも、個性ある選択をしている例を多々見てきた。こんなことが現実可能なもの総合科学部のカリキュラムの学際性の証左といえる。

### 3. 学際性の理念と現実

学際的な教育と研究の必要性がいわれる理由の1つに社会的なニーズのある研究分野で、旧来の学問分野からすれば種々の分野にまたがるものが増えて来ている事実がある。物質の諸性質の解明と開発や、生命現象の解明もそうしたものであることはすでに述べた。そのようなテーマに臆することなく幅広い視野で取り組みうる人材を育てることが総合科学部の1つの目的である。別の側面として「専門バカ」という言葉もある。これはある1つの狭い研究テーマに入り込み、微細に研究を進めているのだが、幅広い立場の価値判断からするとあまりにも細かすぎて高い評価を与えられないということである。物事を分析的に研究していけばどうしても陥り易い事であるが、“総合科学”という考えはそうした傾向に落ち込んでしまわないような目的をもっている。

また、教育と研究の組織面で見ると、「総合科学科」という1学科に多彩な分野を包含することにより、その内部で離合集散によって時代のニーズに合った組織づくりがいつも可能であるというメリットがある。

ところで、飛翔No.39では総合科学部の各コースの一貫した概念とか集められている専門分野の整合性の相互関連が今1つ捉えにくいといった点が指摘されている。教官サイドでは十分コンセンサスが得られていて現に実績を上げていても、学生の皆さんがもっとはっきり知りたいと思っている点については機会を作ってしっかり理解してもらい必要があるだろう。

教育の目的は人材を育てることにあることは明白だが、総合科学部の卒業生が企業で評価され活躍しているという現実の実績は、これまでの卒業生の皆さんの努力の賜に他ならないが、学際教育の成果とも言えるだろう。

(武田隆義)

## 数理情報科学コース

「飛翔39号」の数理情報コース関係の記事を拝見した印象を書きます。

全体によく調査してあると思いました。特に工学部システム工学課程、及び理学部数学科との授業科目対応表は私自身にとっても参考になりました。数理情報コースは広島大学にはありませんが他の大学には幾つもある情報科学科のイメージで捉えるのがおそらく一番適当だろうと思います。

一つ補足すればシステム工学課程がハードウェアを重視しているというのは間違いではありませんが、現在ではハードウェアとソフトウェアの境界ははっきりしたものではありません。実際に半田ごてでICを配線するといったタイプのハードウェアの勉強はほとんど無いはずで、力点はハードウェアを管理・操作する為のソフトウェアに置かれているはずで。

数理情報コースの特色や欠陥に関する指摘も概ね的を射ていると思います。それは一言でいえば極めて多くのものが、互いに脈絡無く並べられてある事、従って皆さんにとって学習・研究的を絞りにくいという事だろうと思います。(このことは実は創成以来の総合科学部全部に付きまとう原罪の問題であり、学問のスーパーになることなく学部を統合する理念としての学際性が特に我が総合科学部で叫ばなければならない由縁である事も、おそらく編集委員の皆さんが既に気づかれています事と思います。)

コースの専門科目が多すぎて、他コースの授業を聞く暇が無いという指摘もうなずけます。現在の数理情報コースのカリキュラムはかつてのコース再編成の際の混乱の影響で、内容・各セメスターへの配分の双方で学生に親切とはいえないものになっています。この点は教官側も承知しており、現在その見直しの作業中です。来年度の新カリキュラムではかなり余裕を持ってカリキュラムを組むことが出来ると思っています。

「数理情報コースにおける学際性」について書きます。個人的意見になりがちな事を予め断って置きます。はっきり言って私を含め自分は「学際的」な研究を行っていると感じている教官はいないのではないのでしょうか。但しこれは決して数理情報コースの教官は皆狭い自分の専門領域に閉じ籠っているという意味ではありません。数学と情報・計算機学には共通した特徴があります。それは実体がなく、あるのはむき出しの形式(操作体系)だけだということです。ベクトル $X$ は幾つかの規則を満たす単なる「何か」です。同様に計算機に対する操作は文字通りには計算機内部の電気的狀態の変化であり、それ以外の意味はありません。ベクトル $X$ がある場合には物質の運動を表し、他の場合には経済指標を表すのに使われるのはそれ自身に意味がないからこそなのです。同様に計算機がある場合には物質の運動をシミュレーションし、他の場合には銀行の金勘定をするのに使われるのはそれ自身に固有の意味がないからです。(テレビゲームという自閉症的・自己完結的な使い方こそが計算機の本来の性格を最も良く表しています。)つまり我々はある特定の分野に因われない普遍的な形式を研究対象としているわけです。それが実際に何に使われるか(ある具体的な内容を仮託することにより)は、あえて極論すれば二次的な問題です。つまり我々はもともと他の多くの学問分野の共通の形式・道具となるべき物を研究対象としていて考えていますから、ことさらに学際的といわれてもピンとこないのです。例えば私自身の研究テーマは数理生態学由来の統計学の問題に統計力学由来の方法論を適用することにあります。いささかも生態学、統計学、物理学三分野にまたがる学際領域の研究をしているとなぞとは考えていません。

では数理情報コースの学部専門授業における学際性はどうか。私見では学部で学際的な授業なぞすべきではありません。むしろ講談社ブルーバックスシリーズの何冊かを読むことをおすすめします。卒業研究や大学院の授業は話が別です。又他コースの事情は知りません。数理情報コースでは抽象的な形式を操作する訓練こそを学ぶべきです。この能力は数学の才能とは又異なるものです。但し数学を勉強するときには必須なものですし、それを獲得する一番の方法は数学を勉強することです(もしくは計算機の前に長時間座る事です)。一旦この能力を我が物とすれば、圧倒的に多くの分野への道が開けてきます。但しもしあな

たの本当の目標・野心が最初から他の特定の分野にあるのなら、数理情報コースに来るべきではありません。

（間瀬 茂）

## 地域文化コース

(1)理念としての学際的研究：「地域」研究の学際的アプローチとは？—— 難問ですが、「哲学・史学・文学などといった既成の学問の枠組みにとらわれずに、多角的に、あるいは比較の視点にたつて、世界の諸地域の文化的特質を研究すること」、といえるでしょうか。しかし、古い諺にあるように、「言うは易く、行なうは難し」。具体的な問題として、例えば、音楽を研究する場合、どうすればいいのか？新しい研究分野といえるポピュラー音楽研究に関して、三井徹氏はこう述べています。「音楽として考える段階でもすでにあっていど社会学・文学（歌詞研究）・美学などがかかわってくるが、とにかく、ポピュラー音楽はもっと幅広い取り組みがおのずと求められるものなのだ。人類学・心理学・経済学・宗教学・歴史学などはもちろん、さらには電子工学・耳鼻咽喉学などからの研究でさえ必要とされるだろう」（日本経済新聞、1990年11月27日）。

(2)カリキュラムにおける学際的研究：

①「文化交流論」での取り組み：「クラブ、結社、家元、講・組」、「文化交流」、「移民」、「都市」、「模倣と創造」、「漂泊」、「国境（くにざかい・フロンティア）論」、「翻訳」、「旅と文化交流」、「海賊論とその周辺」、「書物」など。

②総合科目での取り組み：「ヨーロッパとは何か」、「瀬戸内の文化と自然」、「アメリカ——その特質と諸相——」など。（地域コース以外の教官を含む）

③1～7群におけるそれぞれの取り組み：各群が独自の授業科目を開設していますが、理想的なカリキュラムからはほど遠いでしょう。しかし、文学部などにはみられない、多様でユニークなテーマの卒業論文がうまれていることからわかるように、学際的アプローチの「伝統」ができつつあります。学生諸君の研究テーマのいくつかを紹介すると、次のようなものがあります。

〈日本研究〉：文学と女性、俳諧と社会、流行語、鬼霊や星辰の信仰、ウルトラマン研究。〈アジア研究〉：芸能と社会、移民、少数民族、観光についての文化人類学的考察。〈ヨーロッパ研究〉：18世紀フランスの捨て子の実態、政治漫画、大道芸人、移民問題。〈イギリス研究〉：絵画や音楽と風土、子供と家族生活、ノンセンス文学、ジェントルマンシップ。〈アメリカ研究〉：ロック音楽、ニューシネマ、ディズニー研究、アンデスのキリスト教。〈比較文化研究〉：少女マンガ論、映画論、ゴシック建築、演劇空間、神話と哲学。〈民族社会研究〉：昭和63年度に発足した群で、発展途上地域の地域開発、太平洋におけるミニ国家の問題など、いろいろの研究テーマが考えられます。

以上①～③の取り組みについて根本的な見直しが必要に思われます。21世紀を見据えた、インパクトあるテーマ（例えば、エスニック集団と地域国家、国際化と地域主義の問題など）を取り上げるべく、カリキュラム上の工夫が必要でしょうし、場合によっては群の組み替えも考えねばならないでしょう。

（友田卓爾）

鯨坂研究室に通うようになってから一年足らず、まだまだ研究室を紹介するには修行がたりませんが、この一年間での“発見”を綴ってみたいと思います。

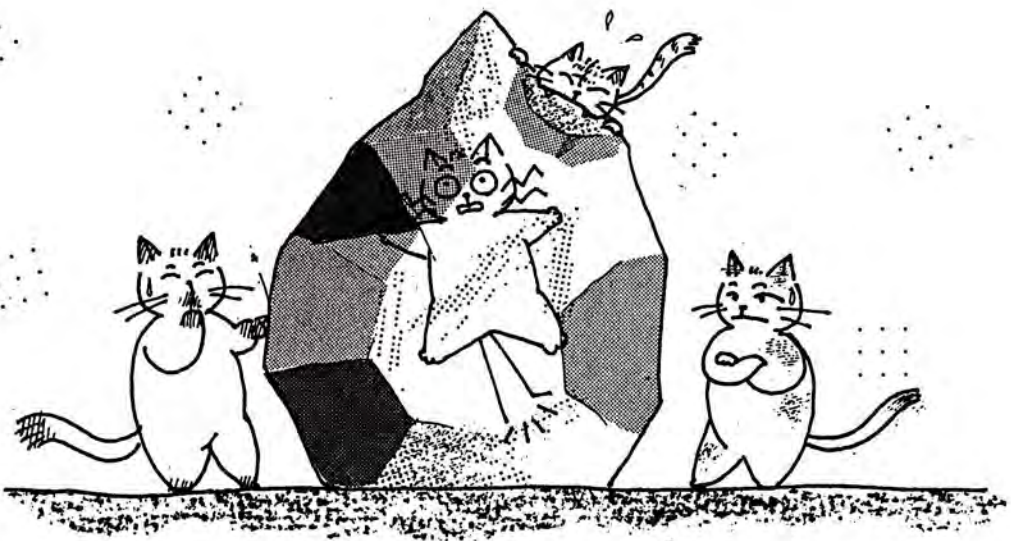
春……慣れない研究室で先輩方にお茶を入れていただき恐縮しっぱなしだった。そして、研究室の中にあるいろいろなものがあるのに驚いた。

夏……暑い暑い夏だったが、研究室の中では、一昨年の現地調査に続く春におこなった、県北作木村と布野村への住民生活調査の必死のコーディング作業が続けられ、作業に不慣れな3年生を相手に先生も汗をかいて下さった。小さな研究室に5人もはいるとクーラーもへとへとで、少しでも涼しくしたいというのがみんなの願いになってくる。そこで、なんと！（もちろん先生の案で）でっかい氷が登場し、気分だけでも涼しくなったような……そして作業の合間のお茶の時間には、過疎の村で暮らす人々の切実な言葉や、その生活の様子などをめぐる話し込むうちにどんどん時はたっていった。

秋……秋といえばセミ旅行。一昨年の京都に続き去年は神戸。神戸ワイン城、ポートアイランド、異人館周辺の散策も楽しかったが、中でも最も印象に残ったのが神戸市真野地区の見学である。この地区で昭和55年より始まった一人暮らしの老人を対象とした給食会に参加させていただき、そのあと、まちづくりの推進役となっていらっしゃる方々に地区一帯を案内していただいた。住民主体・住民参加のまちづくり、住民運動を支えるものはごまかしのない正しい調査である、という住民リーダーの方の熱いことばが胸に残った。

冬……4年生の先輩方は卒論に忙しい季節となり、研究室のホワイトボードには、“あと〇〇日”と書かれた文字が現れた。そして、一年のしめくくりの行事、クリスマスパーティーでは、プレゼント交換など大いに盛り上がり、先生の口からもジョークの嵐が吹きまわった。（だれも止められない）

“喫茶あじさか” “たこ部屋” など味のある異名をもつこの研究室ですが、卒業していかれた先輩方からの、先生・研究室宛に届けられる手紙を見ていると、なんともしみりとした気持ちになる今日このごろです。



## 「私の研究室」

私の研究室は紹介するほどの価値がありません。その一番の理由は、私自身未だ専門の学生を抱えていないことと、研究は主として自宅で行なうので、自分の専門に関係する書籍はほとんど自宅に持ち帰っているからです。ただビデオ機器が備え付けてあり、ドイツ語訓練ビデオやドイツ語コースとしてドイツの映画が集められていますので、興味のある学生は利用して下さい。聴取法と呼ぶドイツ語の授業を担当した時は、研究室でビデオを使って訓練しています。いつも5～6人ぐらいの学生数で、しかも興味を持っている若人が相手なので楽しい——学生の方は宿題が多く楽しいかどうか分かりませんが——授業の一つです。

私がこの研究室に入って10年以上経ちました。最初に足を踏み入れた時、何か得体の知れない、だが心地よい妖怪に出会ったような気がして、その気持ちは今でも続いております。私の前は大入道が住んでいたよと言われましたが、さもありなんという雰囲気でした。最初この建物を目撃した時、兵隊の官舎かな、と思いましたが、実際大学の建物だというので驚嘆し、次に感心いたしました。何もかも古ぼけていて、黴臭く、埃の堆積した物体に囲まれ、いかにもE.T.ホフマンの非現実世界に入り込んだ気がして、好奇心からワクワク、ゾクゾクしていました。廊下は節電とやらでいつも真暗。一瞬カスパー・ハウザーのニュールンベルクの地下室を連想します。瞑想には適しているのかも知れません。しかし内も外も必ずしも静かではありません。それでも、椅子に座ると妙に安堵します。10年以上の歳月がそうさせるのでしょうか。分かりません。椅子に座ると、研究室の、いや現実の裂目から非現実の、超自然の世界に入っていくことが出来るのです。空想の世界にです。その空想があまりに素晴らしいと、自宅の机に座った時、ノートに書き留めておきます。研究室でそうなると、事務的な仕事はもうそっちのけです。何かガスのような空気の流れがあって、私の頭の周囲をゆっくり、やんわりと回ってくれていて、やがて外でマイクがなる音も耳に入らなくなります。非情な授業開始のベルとか電話のけたたましい音とか誰かがドアを叩く雑音がするまで、私はその夢想の感覚を舌舐めずりしています。もっともこれらの音も全て聞こえなくなる状態になった時は、退職しなければなりませんでしょうが。勿論、こんな心地にさせてくれるのは滅多にある事ではありません。

私はドイツ文学を研究していますが、対象はロマン派でなく、20世紀のドイツ文学が中心です。表現主義文学は得体の知れない文学で、それまでのあらゆる文学の主義や派を打ち壊して、何か新しいものを確立しようとした文学の打ち壊し一揆みたいな文学です。それは20世紀という複雑な時代のなせる要請であり、従来の表現形式では伝えようとするものが伝えられなくなって、文学が文学を越えなければならなくなったということでしょう。しかも従来の形式をいくら否定しようとしても、その否定の中には常に「従来」がついて回ることが分かってきました。アンティ・テーゼは必ずしもテーゼの否定でありえない、テーゼを否定し切れないことが分かってきたのです。首から上で成り立っていたヨーロッパの弁証法も髪が抜け、皮膚が爛れてきたのです。従って首から上だけでなく、個人の肉体全体で、つまりは宇宙自然の全体で文学しなければならなくなってきたのだと思います。物理学でも「無」から「有」が生じ得ると説き始めた今日、人間存在の中枢を脳という一部分に置くのではなく、肉体全体、細胞の一つ一つに求める必要がある。その場合、東洋的な「無」の思考が、即ち元来「有」であるその「無」の定義が、西欧文学の中で問題になるでしょう。文学も今日、試みとしてあらゆる分野と手法が新しいやり方で取り入れなければならなくなった。そういう文学者としてドイツにA. デーブリーンがいます。しかし表現主義は定まった文学手段を確立した訳でなく、文学は文字（及び記号）を使う以上、文の芸であることを止めることが出来ず、今のところまだ絵画、音楽などと融合できずに、厳しい一線を画していなければなりません。その苦しみは今日まで続いていると言えます。

研究室の紹介とはならなかったかも知れませんが、周囲にガスが立ち籠めてきましたので、この辺でご容赦願います。

## 専門分野に捉われず

4年生のN君と大学院生のY君の、研究室での会話です。

N君「僕はこの研究室に来たばかりで、ここがどのような所なのか全然知らないんですけど。」

Y君「教えてあげようか。この研究室には先生が3人おられ、色々なテーマをもって研究が行なわれている。

また学生も様々な人達が集まっていて、事あるたびにお酒を飲みに行ったり踊りに行ったりしている。」

N君「遊ぶことがテーマのひとつみたいです。」

Y君「このままだと誤解されたままになってしまうな。ちゃんと研究内容も説明しよう。まず、テーマとしては大きく分けて物質探索と材料開発ということをやっている。物質探索というのは例えば、色々な元素を溶かし合わせたり混ぜ合わせたりして新しい物質を作り出したり、その物質の性質を調べたりすることなんだ。だから自分の手で、世界でひとつしかない物質を作ることが出来る。」

N君「物質の性質という具体的に？」

Y君「話が難しくなるけど、例えばその物質の電気伝導性とか、磁氣的性質を調べるんだ。つまり“物性”の事だ。物性と言っても色々な意味が含まれているけどね。自分が想像していなかった結果が出るとわくわくするよ。その時にその事を知っているのは自分だけなんだから。」

N君「何となく分かる気がします。全く新しい物質を作るということは面白そうですね。」

Y君「そうだね。アレとコレを混ぜ合わせたらどういったものが出来るだろう、その比率は？というふうに先生方と議論しながら研究を進めていくんだ。それで良い結果が出たら“よし！”と言って踊りに行く。」

N君「妙に踊りが好きなんです。」

Y君「特に先生方がね。だけどこれが僕達の明日のエネルギーになるのだよ、フフッ。」

N君「正当化されたような気が……。ところでもうひとつの大きなテーマである材料開発というのはどういう事ですか。」

Y君「さっき説明した物質探索を基礎的な面とすれば、材料開発は応用的な面と言えるかな。つまり、実際に世の中で役に立ちそうな物質——材料と言った方がいいかな、それを研究・開発して行くんだ。だから、“コレはモノになりそうだ”という材料を作って一獲千金も夢じゃあない。実際、特許をとった先輩もいるよ。」

N君「夢のある研究ですね。その代わり、創造性というか、新しい発想が必要になるでしょうね。」

物理と聞くと一見堅そうなイメージがあるんですけど、話を聞いているととてもそんな感じじゃないですね。」

Y君「現在、物事はすごく細分化されつつあるけど、逆にこのような最先端の研究は、あるひとつの専門分野だけでは片づけられなくなっているんだ。今の場合は物理だね。化学も必要だし、工学、時には経済、社会の事までも必要になる。」

N君「学際性というのでしょうか？」

Y君「そう言うとオーバーかも知れないけどね。そう言えばそれは総合科学部の理念のひとつだったね。とすれば、この研究室は総科らしい研究室と言えるかな、あるいはそうありたいね。」

N君「今から自分がする研究が楽しみになってきました。」

Y君「そう思うことが一番だよ。何に関しても自分がやっている事に興味がなくて面白くないし、ヤル気も起きない。良い結果も期待できない。まず自分がしてみたい事を明確にしておくことだと思うよ。」

また、物理が好きの人だけでなく、化学とか、地学とか色々な人が集まって研究を行ったら楽しいし、刺激にもなると思う。知識は決して広く浅くというように容積一定ではなくて、要は本人次第なんだから。」

N君「研究室の雰囲気が分かってきた気がします。」

Y君「話がまとまった所で、みんなで踊りに行こうか？」

以上、N君とY君の雑談でした。研究室というものは学生にとってなかなか入り難いものですが、興味をお持ちのみなさん、気楽に立ち寄ってみては如何でしょう。



## 退職の辞

保田 茂次郎

(自然環境研究コース)

毎年、年度末になるといろんな印刷物に退官者の挨拶が出る。「あゝこの先生も御停年か、事務のこの人もか、世話になったなァ」とひとしきり過ぎたことを思い出す。とうとう私にもその役目が廻って来た。いくら本人が若い気でいようと、逆にどうにもならぬ衰えを感じようと、生年月日は人事係の所管する所でどうしようもないものである。

あと2、3年もすれば旧制(もう旧制と言う語も死語であろうが)の出身者はすべて現役をはなれる。戦中戦後、旧制の最後に近いところで学校を出たが、特に広島人にとってのこの時期は、今にして見れば学校とも言えぬ学校の、学生とも言えぬ学生であった。しかし、ともかくも卒業して1年会社勤め。焼けた工場の鉄骨が赤く錆びていた。再び広島へ帰って理学部へ8年、そのあと3年間私学へ出て昭和38年から皆実分校へ。附属学校と入れかわりに東千田町へ移っていた。今の半地下の旧自然棟だけが出来ていた。東千田町の中の分校は翌年教養部。

建物が北へ延び、さらに正面玄関へ延びて行く間に、安保問題を中心に学内外の雲行きはあやしくなり、羽田や佐世保の火種が学内で発火したのが昭和42年頃から。えらい所へ来たと思ひながら毎日走り廻っていた。正面玄関から西側、5、6番教室の部分が建つと一緒にスト、封鎖して解除、連日の大騒ぎ。時は移り教養部が総合科学部へと変りながら建物は古びて、やがてあと何年かで姿を消す。耐用年数はまだあろうが狭く不便なのを何とか使っている。私もこの建物と同じ年数で、もはや耐用限度、廃棄処分にする。いつの間にか27年が経った。

学部創設の時から始まった、紛争とは異質の苦労は今も、また今後も続くのであろう。教職員各位の努力が大きな成果となることを確信するが、学生諸君もそれによく応えて現在の学部を創り上げて来た。長年の御厚誼を深謝し、あわせて学生諸君の前途の多幸をいのる。

## 宝もの

杉本 助男

(生体行動科学コース)

私は外見より欲ばりな人間だと自覚している。宝さがしが好きである。むしろ宝を追い求めるのが人生だとも思っている。だから13年前に広大へ赴任したときも、総合科学部でどんな宝を見つけることができるか、さまざまな期待をもった。結論から言うと、期待したところに宝はなく、別のところにあった。私が名古屋大学から広島大学へ赴任することを決意させたものは、第1に総合科学部という学部名であり、第2に新キャンパスでの新しい研究室づくりであった。

私が先ず期待したのは、総合諸科学の共同研究から生まれる宝であった。これは見事に期待はずれのものとなった。総合科学部には確かにさまざまな領域の研究者がいる。しかしそれらが相互に有機的に機能していない。つまり一品料理のメニューは豊富なのだが、それらをうまく構成してフルコースの味を出せない。赴任した当時、私も少し努力したつもりだが、だめだった。プロジェクト研究チームをつくるということは観念的に受け入れられるのだが、共同研究として具体的に動かない。

学生も私のような期待をもって総合科学部へ入学したという話を何人かに聞いた。この13年間、総合科学部で私が遭遇した学生はほとんどすべて個性的で良い学生達だった。

名古屋時代の友人が総科へ訪れた時、プレハブの狭い研究室へ案内することにためらいを感じたことがあったが、彼は意外なことを言った。「何か暖かい雰囲気だなあ。学生達と一体となっていて、活気があって、うらやましいなあ。」確かにそうだ。冬の朝早く研究室へ来ても、学生達が夜遅くまで居たせいで部屋にぬくもりが残っている。こういう研究室から去っていくことが、いま一番淋しい。あと3年、3年といいながら、西条への移転が伸びて、新研究室づくりができず、プレハブに長期間居座ったことが良かったのかもしれない。

私がここで得た宝ものは、総合諸科学の共同研究でもなく、新キャンパスの研究室からでもなく、総合科学部に期待して入ってくる学生達だった。

総合科学部が今後一層良い方向へ発展していくことを祈り、退官の言葉とさせて戴きます。

## 「何のために論文書くの？」

水本久夫

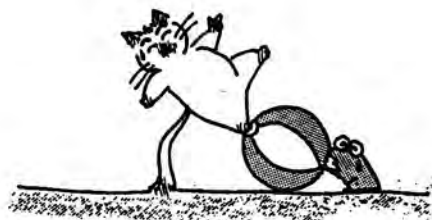
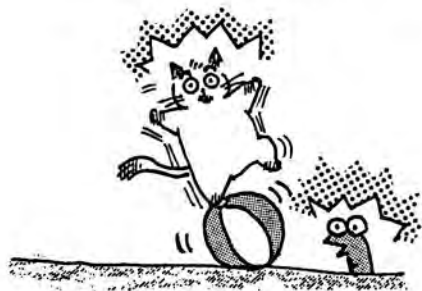
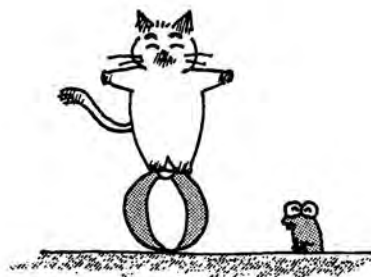
(数理情報科学コース)

今日は12月9日の日曜日。明日は、「飛翔」原稿の締切日である。そのことに気がかりながらも、以前からいきづまっていたことで、最近、思いついた研究の内容を書きとめるべく、書斎にこもっていた。お昼になって、「お食事ですよ。」と家内がよびにきた。食事をしながら、上の娘が、「いま、何してるの？本、書いてるの？」とたずねてきた。「論文、書いてる。」と答えたら、「何のために論文書くの？自分のため？」とききかえしてきた。私は、「うっ！」とうなってしまった。返事に窮していると、娘は「日曜日ぐらい、遠くへ遊びに出かけたら。」といい、家内は、「趣味なんですよ。」と、勝手に結論づけてしまった。

昨年、私は還暦を迎えた。来春、退官して、倉敷市に新設の川崎医療福祉大学へ移る。今まで、自分は何のために論文を書くのかを、深く考えたこともないし、ましてや、社会や学界の発展に貢献するためなどという、おおそれた目的など抱いたこともない。強いて言えば、広島大学総合科学部の教官として、論文を書いて研究業績を挙げ、学生の指導に役立てる義務があることを感じていたぐらいであろう。しかし、来春、退官してしまう人間には、その義務を果す必要もなくなってしまうわけで、とすれば、もう、論文を書く必要もなくなってしまう。娘が、「何のために論文書くの？」と聞いたのは、ある程度、そのことを察して言ったのかも知れない。さて、それでは、何のために論文を書くのか、あらためて考え直してみると、家内が、「趣味なんですよ。」と言ったことが、ある意味では、当たっているような気がしてきた。そりゃ、数学の論文を書くということは、大変な労力と時間を必要とする。何の目的もなしに、何故、好き好んで、あえてその大変なことをする必要はあるのか？それは、ある物（理論）を作り上げていく過程の楽しみ、作り上げたときの喜びにあるような気がする。それは、恐らく、他の創作活動と共通したものであるであろう。これからも、アイディアが浮かぶ限り、論文を書き続けたいと思っている。ちなみに、上の娘は、昨春、広島大学教育学部を卒業し、現在、OLである。

総合科学部の学生諸君、諸君の基礎的な学業の積

み重ねが、将来に役立つことを信じて、学業に励まれることを祈っております。最後に、総合科学部の教官、事務官の皆々様、昭和52年に赴任しまして以来、14年間の永きにわたって、大変お世話になりましたことを、心から感謝申し上げます。



## 授業の裏側——総科の生活をふりかえって

清水 昭 俊

(社会科学コース)

広島大学に在職したのは12年半。よくいわれる「十年ひと昔」よりも長く、確かに、なまはんかな期間ではない。それは学校教育に当てはめればよく解るところで、実際、赴任当時保育園に通っていた私の娘は、大学の入学試験に臨もうとしている。

大学での仕事、つまり研究と教育の内、思うところの多いのはやはり授業で、特に総科には、一般教育から大学院までの多様な学生を相手にするという、対応のむずかしい条件がある。研究は狭い範囲の問題を掘り下げることになりがちで、他方、授業は人類学としてのバランスが必要だから、自分の専門の研究内容はなるべく授業のテーマにしないという方針をとってきた。大学院の授業や、学部の内でも演習は、テーマに関わらず勉学の意欲が感じられて、授業をする楽しみを味わうことができた。しかしそれ以外の授業では、授業を終えて砂を噛むような気分になったことも、稀ではない。

学部専門の授業は、学生の姿勢がとらえがたく、未だに適切な授業内容を見定められずにいる。文献（リストでなく現物）をコピーして事前に学生各人に配布したこともあるが、なかなか読んでもらえず、結局学生に勉強を「強いる」にはレポートを課すしかないといったところに、終わりがちだった。「選択必修」という語義矛盾を含んだ名前の授業構成は、学生に自分の関心に即して授業を選んでもらうための工夫であるが、目標がなかなか定まらず、必要単位数を埋める姿勢から抜け出すのが、むずかしいのかも知れない。総合科学科は学生数の割に授業科目数が多く、学生にとっては贅沢な条件にあるが、それを活かすには意欲が必要で、その点、私には学生に対する不満が残っている。時には学生に睡魔が蔓延し、俵万智さんの歌をもじって、「眠る子を、たたき起こしてこうぎ（講義、抗議）する、ここは国立、広島大学」などと板書したこともある。

一般教育も工夫を要した。これは文化人類学という学問の性格による。人類学は異文化の研究で、エキゾチックな生活内容は物珍しいとしても、所詮は他人事である。異文化の話題をどこかで今の日本人の生活に結びつける必要がある。しかし、話しを聞くのは年端のゆかない（失礼！）学生で、教科書を使わずに、彼らの少ない生活感覚に訴えて納得して

もらうには、授業内容を結構考えることが必要だった。興味を持った学生が参考書を尋ねて来て、まだ適当なものがないと答えることもあり、それが一般教育の授業では一番楽しい時だった。そんなテーマがやがて専門的研究のレベルへと成長し、私の論文、さらに著書として実を結んだ訳で、こうした論文類にいくらかオリジナリティがあったとすれば、学生は私の一般教育の授業で、人類学の最前線での議論に、それと気づかずにつきあっていたことになる。

大学院から一般教育まで、授業は私の思考を鍛えてくれるいい場所だったが、今度行くところは博物館で、授業の義務はない。その解放感とともに、自分に思考を強制する場が少なくなると、気がかりでもある。「博物館行き」、つまりボンコツにならないよう、心がけねばならない。

## 脳裡に甦る3つのシーンと自己反省

陣 崎 克 博

(地域文化コース)

総合科学部在任19年の間、『飛翔』とどれだけ関わりがあったか調べてみた。編集に携わったことは一度もないが、『飛翔』関連誌に書いた4つの記事の記録が出てきた。①「ボクの願いと意識の流れ」『総合科学』No.1（昭和49年）②「テニスは楽し」『飛翔』No.16（昭和55年）③「織りなす横糸——“カナダとアメリカ”の実施責任者として」『メタセコイア』No.18（昭和59年）④「よりよき就職のために」『飛翔』No.32（昭和62年）の4編である。

キーワードでいえば、総合科学部設立準備委員会委員、硬式テニス、総合科目、就職委員会となる。キーワードを更に付け加えて、ユダヤ系アメリカ文学、フルブライト、中国四国アメリカ学会、アメリカ学会、アメリカ文学会、中国四国アメリカ文学会、地域文化、コース講座委員、外国出張、中国新聞文化センター、図書館、多山報恩会と続ければ、大体この19年間の私の生活の情報検索が可能となる。

◇ ◇ ◇

停年退職の弁は、プライベートなことをものしても許容される恐らく唯一の機会であろうから、引き続きこの路線を継承させていただき、キーワードによる検索で脳コンピューター画面に写し出された3つのシーンと、それに伴う自己反省を記して、この稿の責をふさぎたい。

## シーンIとシーンII

「事務室は徹底的に破壊されました。このような物心ともに荒廃した母校に先生をお迎えしなければならないことは残念で、全く申し訳ない気持ちで一杯です」昭和47年初春、長崎大学から転任予定の私に宛てられた藤本黎時先生の手紙の一節である。同年夏、千田町工学部キャンパスで行なった昭和46年度末試験の状況、教室の壊れたガラス窓が、妙に鮮明によみがえってくる。

いろんな側面での学園紛争の後遺症になやまされながらも、当時の教養部は徐々に立ち直っていった。昭和49年春には総合科学部となり、今堀学部長はこれを筆頭学部とした。昭和53年春には地域研究研究科、環境科学研究科が設置される。今堀学部長の秀れたリーダーシップのもと、学部の構成員は一丸となって邁進し、部内には熱気があふれていた。将来計画委員会や大学院問題推進委員会が、夜遅く8時～9時ごろまで続けられ、空腹と疲労で「早く終わらないかなー」と荒谷委員長の顔を眺めていた情景が浮かんでくる。

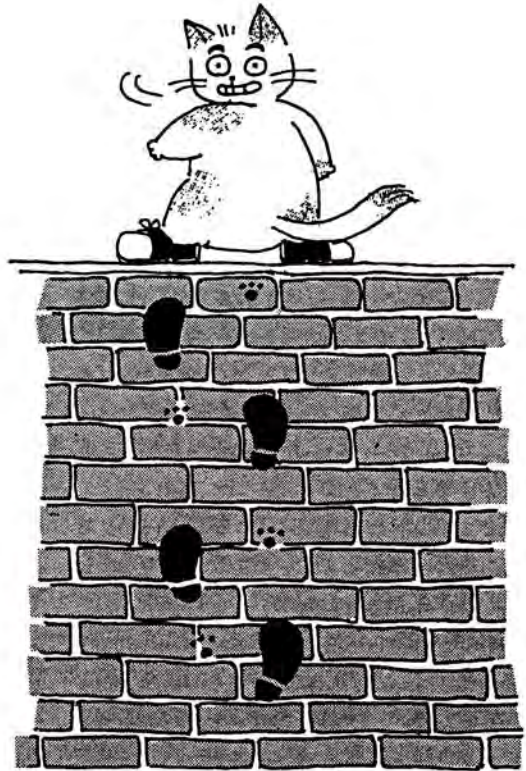
(反省) 紛争の暴力は別としても、当時のあの燃ゆる情熱、安易を振り捨てる冒険心、逞しき意志はいま一体どうなっているのであろうか。総合科学部は向上発展しているのか、下降線を辿っているのか、それとも横這いの平坦な道を可もなく不可もなく歩んでいるのであろうか。新しい学際領域を開拓しようとする総合科学部で最も要求されたのは「創造性」「人間性」「総合性」であったが、創立以来約17年、この目標は研究・教育の両面において十分達成されているのであろうか。そして私は、学部にごどれだけ貢献してきたのであろうか。

## シーンIII

1976年4月から1年間、フルブライト上級研究員プログラムで、コロンビア大学に出張させていただいた。一切の通常業務から解放されて、自由に研究のできる教官冥利につきる期間である。到着してから数ヶ月、資料集めや訪れてきた家族の接待に追われているうちに9月となった。帰国する家族を見送ってケネディ空港からの帰途、遅々として進まぬ博士論文の進行状況に今更のように愕然としたのである。それからの数ヶ月、バットラーホールの一室での悪戦苦闘が始まった。執念にとりつかれたように、連日研究に没頭し、ときには深夜に及んで英文原稿をタイプライターで打ち始め、気が付くと朝がほのぼのと明けていることもあった。それは苦闘というよ

りもむしろ、静ひつな喜びが心の底からうつつとして湧いてきて「ひとすじの精進」を続けている自分を励ましているという静かな心境であった。天野学部長の言われる enthusiasm にひたれたあの数ヶ月のあの部屋でのあの自分のイメージが、今も脳裡に刻みつけられて忘れられない。

(反省) 若かったときや短期間は別として、その後このような状態となったことは、あまりない。研究者として内心忸怩たるものがある。「一流の研究成果を挙げ、それを自信をもって学生に教えることが、最善の教育である」との、11月30日日本でなされた公開講演における有馬東大総長の言葉が胸にしみる。



## 郷里で停年を迎えるにあたって

栃木省二  
(自然環境研究)

昭和52年10月、30年ぶりに懐しい郷里へ帰らしていただき、13年半も御世話様になることができましたのは、ひとえに自然環境研究の諸先生方をはじめ総合科学部・各学部の皆様の御蔭と心から感謝しております。朝な夕な、広島城を見ながら、子供の頃三年間あばれまわった幼年学校の跡を横切るにつけても、ふっと幼い頃を思い出すことがあります。

戦前は千田町に住んでいまして、道路でローラースケートをしたり、皆実町にできたアイススケート場へ小学生で滑りにいったり、附小の大運動会では、教生の先生でもある文理大や高師の学生さんたちと門前ののしかを売るお店にいったり、土俵びらきにみえた双葉山にぶつかったり、南大橋の近くで泳いだり、しじみ貝をひろったりしたことなどなど、まさに走馬燈のごとく、よみがえってまいります。教授会するとき6階の廊下から見える安芸の小富士に、なんともいえない感慨がこみあげて、しばしたたずむこともありまして。さて総合科学部へまいりまして、全学のフレッシュマンたちを対象とした一般教育で他大学にない自然災害概論をもたせていただいたことは、専門の砂防学・地すべり学で23名の専攻生をえたことと共に、これまた大変有難いことでした。なかでも地すべり学は、実学の実学でも特に県庁の林務部や土木部をはじめ、建設省や林野庁などと関係が深く、広島県や高知県のみならず、東は群馬県から西は長崎県まで、各種の委員会に参加することができ、その都度えられた新しい情報をわかりやすく加味して学生諸君に講義したためか、とうとう最終期まで、受講希望者のクジの倍率が数倍という結果となりました。これら受講生の諸君が卒業して学校の先生になったとき、子供達に土砂災害から住民の生命財産を守るために、砂防学や地すべり学という研究分野があり、土砂災害防止工事が全国で数多く実施されていることなどをP.R.していただければ、小生、広大での13年間もってめいすべし、といえるでしょう。何度も申し上げますが、長い間、広島大学総合科学部という立派な学部で勤務することができまして、ほんとうに有難うございました。衷心より厚くお礼申し上げます。

## 転任のことば

小川 侃  
(ヨーロッパ研究)

広島大学を去るにあたって「飛翔」編集部から「転任の言葉」を書くように依頼された。実は、私は広大に着任したとき「着任の言葉」にあたるものを書いた覚えがないのだが。——このたび13年間に及ぶ教育と研究の時を過ぎた広島大学の総合科学部を離れることになった。私が赴任した昭和53年当時は、まだ創設(学部の)間もない頃であり、今日では死語になったが「白人/インディアン」などという言葉がまじめに取り交わされ生きていた。広大に来たときは、駆け出しの哲学研究者で意気は高かったが、基本的方針の模索の時期であった。広大の地域文化研究コースに身をおいてあらたに得た発想もあり、これも含めて、この13年間には、多くの仕事が解決をみたので、感無量でもある。その間1年8ヶ月余り、ドイツのフンボルト財団の奨学研究者として、ドイツのヴッパータールとキールの大学に滞在研究する機会を与えられ、広大からも支援を得たのを感じている。この留学は私にとって余りに稔り多いものであり、現れの理論、構造論的政治哲学、古代ギリシア哲学への情熱等は、このときの成果である。ただ当時は、海外研究を「遊学」と同一視する風潮があったため、最終的には二年の滞在延長を広島大学から認めてもらうことができなかったのは遺憾である。

広島での13年間は、32才から45才という人生のもっとも重要な高揚の時期に相当し、ギリシア人がアクメと呼んだ40才を真中に挟んでいる訳であり、研究と教育に充実した日々を送ることができたのは幸いであった。気候温暖で——夏の風を除けば——酒・魚はうまく、海が近くにあり、山も遠くなく、多くの良き優れた同僚に恵まれた。

広島を去っていったかつての同僚が多く、広島時代をなつかしみ、今日においても、私の家のベルが鳴ることがあるのは、広島之余徳とでもいえようか。

## 二人の女性

それぞれの世紀末——退職の弁

森 祐 二

(平和科学研究センター)

ルー アンドレアス＝サロメは、ニーチェやリルケの恋人として知られる。ルーなしにはツァラトストラは生まれなかったろうとか、リルケは象徴詩人たり得なかったらうなどと言われている。ルーに初めてめぐり逢ったのは1946年、旧制高等学校の寮のなかで回し読まれていた「リルケ」であった。著者の名前がいかに謎めいていて好奇心をかきたてただけでなく、内容はさらに謎めいて感じられた。それは私のリルケ像を根底から変えてしまっただけではなく、そこに精神分析を臭ぎつけた。そして何よりも、私にとってそれは世紀末体験として深層心理に刻印を残すこととなった。

19世紀末は神を殺した。ニーチェもサロメも。そして、ニーチェはナチスにからめとられたけれども、サロメはその対極に立った。彼女の手にあったニーチェの手紙はついにナチから守られたという。神を殺した世界は、一方では凶悪この上ないジェノサイドの世界戦争を引き起こすこととなった。20世紀は世界戦争の世紀であった。

ルー自身に即して言えば、夫のアンドレアスは特異な言語学者。結婚してからも彼女は多くの恋人をもち、男たちのなかに踏み込んで思想家として磨きをかけてゆく。そして、フロントの弟子として晩年は精神分析の仕事に従事したという。自由奔放に男性遍歴を重ねたといえればそれまでだし、また、愛と性と創造と言うように通俗的につなげることもできよう。だが私は断じてそのような見解には立たない。世紀末の退廃（その最大のものが二度の世界戦争に結果する）のなかにあって人間として目覚めたひとりの女性の創造活動の姿を、私はルーに見る。

日本社会は19世紀末を経験しないままにすぎた。ここまできて、突然に思い出されるのはピアニスト、マルタ アルゲリッチのこと、先年広島公演を聴いてその音楽性にうたれてからのことである。その後気づいたことは、彼女の音楽は相手のある時にこそ、つまり協奏曲や室内楽の協演においてこそ、輝くのではないかということであった。そして自身の芸術を鍛え、豊かにし、その幅を広げる。たしかに、ある時は寄り添うようにやさしく、また、きらめくように躍動し、ときにはツッパリ、張り合い、対抗す

る演奏は、えもいえず楽しい。そうして曲に生命を吹き込むのはもちろんのこと、相手の特徴を十分に引き出しているのは見事というほかはない。彼女が室内楽に意欲的であるといわれるのもうなづける。

そのマルタにも演奏家を断念して結婚生活に入った時期があったという。ショパンコンクールが転機となった。（その時の演奏は録音されていて聴くことができる。）彼女もまた恋おおき女である。それがマルタの芸術を育て、豊かにし、鍛えたことは確かなことである。

世紀末を迎えつつある今日、私にはまだ20世紀末は見えてこない。サロメに引かれすぎてアルゲリッチを呼び出してしまったが、愛の恋のを言うのが本意ではない。だが、愛の姿は創造のもっとも分かりやすい形のように思われる。しかもそこには時代が色濃くしみ込んでいる。

日本社会は、再び、20世紀末も経験する事無く過ぎてしまうのであろうか、という恐れに似た気持ちを拭いきれない。戦争と平和の対峙がどの側に動くか、文化の創造に大きく左右されるのは確かである。

# 総科沼田研修 '90

平成2年9月1日(土)～2日(日), 広島工業大学沼田校舎(広島市安佐南区沼田町)において, 広島大学総合科学部1年次生合宿研修(通称, 沼田研修)が行われた。

この沼田研修は, 総科生が入学後半年を経た時点で, 総科で何を学び, 研究したいのかを, 自分の志望コースを確認することによって考え直す機会として始められた。その内容は, 志望コース別ミーティングや資料閲覧からレクリエーション(スポーツ), 教官方も参加される懇親会までである。毎年多数の学生が参加し, 今回は169人(申し込み時)が参加した。

この研修の細かい内容は, 私自身の個人的な意見と感想(つまり“独断と偏見”)を書いてみたいと思う。

9月1日(土)

8:30

この時間に集合…というわけではない。1コマめの講義があるのだ。何故1日から…。2コマは空きだが, 遠隔地通学(片道約2時間!)なので帰って来れない。と, いうわけで大荷物を背負ってやって来る。体育会系某クラブの合宿帰りて筋肉痛がひどい。足が痛い。

12:40 集合

休み明けで皆, 再会を喜び合う。“総合科学部様”のバス4台に感動する。

13:00 (…を少し過ぎたと思う) 広大出発

長い。皆, 最初頃は休み中の話で盛り上がるが, だんだん疲れて寝る人が増えてくる。とんでもない山の中で(近くの方, ごめんなさい)自分はどこに連れていかれるのだろうかかと不安になる。

14:00 工大到着・オリエンテーション・学部長挨拶(知育館大講義室)

景色が素晴らしい。緑ばかり。あまりの環境の良さに感動する。キャンパスも(広大と違って)きれい。久々の学部長挨拶に入学当初のことを思い出す。

15:00 待ってました。第1志望コース別ミーティング

皆, 真剣です。コース全体の説明の後, 各研究別の小グループで, カリキュラムから資格, 留学, 就職等について積極的に質問。自身の留学体験も含め, 熱心に語る教官とメモをとりながら真剣に聞く学生。一部, 学部内の裏の話も…

ちなみに, 人数は地域文化12名, 社会科学31名, 外国語23名, 数理情報36名, 物質生命24名, 自然環境26名, 生体行動17名。

17:15 生活棟へ。入浴・夕食

荷物が重い。筋肉痛に階段はキツイ。入浴は浴室が狭い(女子用), しかも時間が15分しかない。工業大学だから仕方ないようだ。食事はなかなか豪華。だけどもう少しあっさりしたものが食べたい。(わがまま)

18:45 資料閲覧(知育館2Fロビー)

各コースのカリキュラム, 教官の研究テーマ, 卒業論文の題目, 就職状況などの資料を展示。コーナーのテーブルには各コースの教官も。コース別ミーティングで言い足りなかったこと, 聞き足りなかったこと, 色々あるようだ。一部で熱心に語り合っている。なかなかアカデミックな話だ。そうでない教官は, 何となく寂

しそうだ。全身から“何か質問してくれないかなー”というオーラが…

#### 20:00 懇親会（大食堂）

これだけの人数、しかも教官も一緒に懇親会…という機会はなかなかない。和やかに語り合っている。やたらと女の子に飲ませたがる教官もおられる。一部つぶれてしまった人もいたようだ。最後の締めはもちろん“安芸の国”

#### 22:00 就寝

…だけど懇親会の続きで、皆話が盛り上がる。時間を守る（ろうとする）人は一体何人いるのだろうか。とにかく、総科生がこれだけ一度に集まっているという機会、皆おしゃべりなどで親睦を深めているようだ。私も加わりたかったが、クラブの合宿の疲れでdown。先に寝させてもらうことにする。

9月2日（日）

#### 6:30 起床

眠い。とにかく眠い。皆、眠そう。この6:30起床というのも合宿ならではの…。

#### 7:00 朝食（大食堂）

眠い…

#### 8:00 自由時間・資料閲覧

再び部屋に戻って寝る人が多い。

#### 9:00 第2志望コース別ミーティング

第2志望なので寝ている人も…。でもまだどのコースにしようか迷っている人にとっては真剣。教官方も自コースのPRをしておられる。

この日は、地域文化42名、社会科学39名、外国語9名、生体行動28名、物質生命27名、自然環境20名、数理情報4名。

#### 11:30 昼食

やっと少しは目が覚めた感じ。ここ沼田での最後の食事でもある。

#### 12:30 レクリエーション

バレー、テニス、ソフト、水泳の4種目。水泳は人数は少ないけど楽しそう…ということで、後から入った人もいた。

#### 15:30 清掃

#### 16:00 工大出発

#### 17:00 広大到着・解散

皆さん、おつかれさまでした。

…というわけだが私の個人的な意見を言わせてもらえば、各コースから参加された教官が3人ずつで、私の場合、自分の行きたい研究講座の教官が不参加だったということが少し不満であった。仕方のないことと思うが…。しかし、こうしてこれだけの人数の総科生と教官が集まって2日間一緒に生活し、語り合う機会というのは、なかなかないと思う。それだけでも私はこの研修に参加して良かったと思う。

最後に、連絡員の皆さん、どうもご苦勞様。

（文責・森野 美和）



## 小特集

# なんてやねん? あ、総科!

今回の『飛翔』第40号では、総科に対する素朴な(?)疑問を編集委員が出し合い、更に厚生補導係前に設置した“飛翔箱”の中に投函されていたものを合わせ、昨年11月28日の編集会議でピックアップした上で各編集委員に割り当て、調査してもらった。このコーナーは、その調査結果である。

なお、まとめるにあたって、各編集委員の報告書の文章は、そこはそれ、同じ人間の書いたものではないので、また、ページ数の関係上からも、文体等かなりの程度手を加えた。いわば換骨脱胎だが、御容赦願よろこばたきはいやだよいたい。え? 許さんって? きゃーっ……

### 《何で一食のカレーには

具が入っていないのか!?

肉はミンチである。だから見えないのだ。ブロックにしたら、肉が入る人と入らない人が出て、不公平だっしょ?

野菜は玉ねぎしか入れてない。ニンジン・ジャガイモは入れたらドロドロになっちゃうそう。

### 《学生番号の尻尾の

チェックの意味は!?

本人が番号を使う際、その番号で正しいかどうか判別する為なんだそーである。へー。

### 《エレベーターは

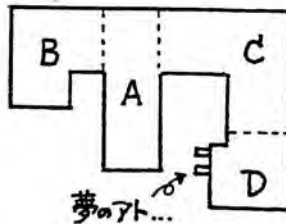
何故片方しか使えない!?

省エネの風潮が盛んだった頃(十年ほど前かな)に、経費削減と省エネの為に使用停止になったとか。現在あの右側のエレベーターの内部には、機械もないそうでやんす。

### 《何で自然科学棟は

あんなに複雑構造!?

自然科学棟に限らず、総科の建物の構造は不自然かつ奇妙。学務第一係に問い合わせると「そりゃー後からくっつけたからじゃろお」……もう少し詳しく調べてみると、1960年に旧自然棟が完成(図A)続いて65年新自然棟(図B)が完成。やがて67年に新館(図C)、68年に新・新館(図D)……だから複雑なワケである。



ところで新・新館の北側の壁。何やらブサイクである。ネットもかかっている。これは、当初の計画で新・新館と旧自然棟をつなげることにしていた為。ところが御承知の通り“移転”の二字ゆえに計画は途中で放り出されたのでアリマシタ。ちゃんちゃん。

《何故》

《教官研究室の広さは違う!?!》

建設時には、文部省基準に基いて理系研究室の方が文系研究室より広くなっており、それが後の大学規模の拡大で教官数が増え、プレハブ等、研究室の広さに差が出てきたということらしい。それで現在では各コースに面積に於いてバランス良く研究室を配分、各コース内でどの教官がどの研究室に入るかを決めている。

ちなみに社会科学コースの場合は、各教官の希望を元に教官間で相談して決めたそうである。

《何故掲示板をピロティーと呼ぶのか!?!》

ピロティー【仏 pilotis】

①脚柱、基柱。②近代建築で地階を部屋とせず吹きっ放しにしたもの。(広辞苑)

杭の意。建物の二階以上に室を設け、一階は柱を残して吹きさらしにしておく建築様式。また、その脚のような柱。建築家ル=コルビュジェの提唱。(大辞林)



ピロティー

—つまり、掲示板=ピロティーなのではなく、建物の形のことなのだ。ちなみに、新館一階より学務の方が少し高くなっているのも、掲示板をpilotisにする為だったそうである。

《社会学ゼミは何故一単位!?!》

ゼミというのは元々一単位なのだよ。地文の演習が二単位とゆーことの方が、フツーでないのだ。地文は講義数が少ないからねえ、それでもって二単位にしてるっつーの。ふふっ。

《何で総科はいつも特別な!?!》

総科が常にまず一番に挙げられるのは、文部省に登録された順番(牽制順序)がそーだから。総科の成績発表の日程が他学部のそれを記した中に出てこないのは、総科だけの掲示板に別貼りされるから。総科と他学部の事務が分かれているのは、総科が卒業まで利用するのに対して、他学部はばんきょーの間だけ(後は、各学部の事務を利用)だから。

……わかっちゃいるけど、ねえ……うん……。



《何故総科一年の為だけに研究室があるのか!?!》

断っておくが、他学部にも学生控室的な場はある。総科二年以降にもコース別研究室がある。一年はコースに分かれていないから、あの半地下研究室が存在するのだ。だから、一年学生研究室は学務、コース別学生研究室はコース事務、と管轄が別である。

創設は1975年5月。目的は、総科生の交流の場を作り、親睦を深めること。無論、今でもその役割は変わらないのだが……もー少し綺麗に使っておくれ。

### 《どうして 半地下'なのか!?!》

……半地下。奇妙である。我々も人知の及ぶ限り手を尽くして取材を行った。いまだ真相は明らかではないが、学務の推測は次の通りである。

その一。半地下のある旧自然棟は1960年に建造された。当時はまだ建築技術が未熟で、地盤の弱いデルタ地帯に四階建ての建築物を建てるには、深く掘り下げるしかなかった。だから半地下なのだ一。

その二。容積率との関係が

ある。広島では昔、四階建て以上の建築物は建ててはいけなかったのだ——ううむ、現在よりも結構な都市計画のような気もするのだが。

……半地下。謎は深まるばかりである。



### 《卒論提出期限は何故違う!?!》

学部としての締切は一律だが、コースによっては多少早い場合もある……ち、地文だよ、地文!! くっそ一……。審査に要する時間から逆算して決めるのだとか。

### 《ストはどうして

#### 総科に来るのか!?!》

人数が多く、インパクトがあるから、効果的である。

もっともである。これに対し『仮面ライダー』のショッカー軍団は、「世界を我が手に」などと言いつつ幼稚園のバスを襲うといったみみっちいことをする。全くのナンセンスだ。

### 《何故総科にだけ

#### 『飛翔』があるのか!?!》

そりゃ総合科学部報だかんね。他学部にあったら変。……何? 回答になってない? それもそーだ。では、もっともらしい答。

大学の機関に学生の参加が認められるのが殆どない今日に於いて、学生の発言権のある場の提供。また「自分たちの学部は自分たちの手で創っていくのだ」という、総科生としての誇りと主体性を生み出し、学生・教官・事務官とのコミュニケーションを深める為。……どーだっ!

### 《至極単純なギモン》

Q. 総合科・学科なのか、それとも総合科学・学科なのか?

A. 後者だよん。

〈このコーナーの編集責任：みーんな定行美佳〉

## ダブル・スクール

何かしなきゃ、何かできなきゃなあ——最近つくづく思います。大学生活も3年が過ぎて、このまま無免許・無資格で卒業してしまうのかと思うと、どうしようかと内心焦ってしまいます。

周囲を見渡すと、英検の準1級に通った外国語コースの友達、情報処理の国家試験に合格した数理情報コースの人がいたりして、自然環境の子は、学芸員の資格を取るために夏休みの間美術館に通っていたし——。資格を取るために大学に来たとは決して思いませんが、やっぱりうらやましいなあという気持ちが心の奥底で顔をのぞかせます。

私はどうしても自分にないものを他の人が持っているとうらやましがってしまうようです。技能面でも経験面でも、いいなあいいなあを繰り返して、さて、私には何かあったっけと振り返ってばかりです。あった！と見つけることもできますが、たいていはないよーと落ち込むことのほうが多いです。

資格ばかりではなく、ダブル・スクールをしている友達——これも私の羨望の対象です。英会話スクール、絵画教室、テニススクール、茶道を習いに行っていた友達もいました。ここまでくると、私はただのうらやましがりですね。よほど自分に自信がないんだなあと思います。

でもでも、私の実家のほうでは、こんなに多種多様なカルチャースクールはありませんでしたし、行く人もあまりいませんでした。ところが、ここ広島にいと、やる気さえあれば何でもできてしまう。やっぱり、私にとって広島は都会なんだと改めて実感してしまいます。

大学生活の中でやるべきことはそれなりに(?)こなしているつもりなのに、何かもっと他にやらなきゃいけないんじゃないか——と、いつもいつも何か追われているような気がするの、私だけでしょうか。もっと楽しいこと、もっと自分を高めることが自分の手持ちの札以外にごろごろ転がっているような気がして、今の状態にちっとも満足していません。きっと私は、すごく欲張りなんだろうね。

でも、たまに私がすごいなあと思っている友達に「すごいねー」と私自身のことをほめられたりして、とまどってしまいます。そうかー、そんなふうに見

てくれる人もいるんだな——と思うと、恥かしい話ですが、やっぱり何となく嬉しくなってしまう私。

自信を失くしたり、自信をつけたり……右往左往してぐるぐる回って、時には自分の中に沈み込んでしまったりしながら、大学生活が過ぎていきます。

多種多様な情報が提供されると、その選択や何かで、かえってストレスがかかることもあるんだなあと思います。うらやましがりで欲張りな私を少しずつなだめながら、周囲の価値と自分自身の価値の折り合いをつけながら、ゆっくり頑張ってゆこうかなと思っている今日この頃です。

(文責・るるる)

## 4年間を振り返って

地域文化コース日本研究群4年  
宮崎 浩

昭和62年4月4日。故郷兵庫県西宮市を離れ初めてひとり広島へやってきたその日である。これから始まる未知の土地での暮らしに様々な思いを巡らせながら、広島駅前に立った時のことはよく覚えている。宇品行電車で揺られて耳慣れない地名を聞きながら広大前に着いた。今では狭いと思う広大キャンパスも、やはり中・高校と比べるとはるかに広く中・高校のそれとは比較にならぬ正門の大きさ、真直ぐに延びる森戸道路、その向こうにそびえる赤レンガの理学部時計台(?)の風景に“大学”という威風を感じた。今日は別に広大に来る必要はないのだが、人影まばらな森戸道路を歩き自分を、その風景の中に溶けこませたかった。もちろん、すぐにはできなかったのだが——。大学生活が始まった!

入学式、オリエンテーションと慌だしく様々な行事が過ぎ、授業が始まる。高校までのくだらない詰め込み学習と訣別し、知識への無限の欲望があった。自分には人文、社会、自然科学いずれの分野にも自分なりの考え方があった。もちろんどれも感ずるまま、思うままの考え方であって論理的な根拠は全然ない。ある意味では、大学という最高学府の学問とやらがそれらの自分の考えをどう変えてくれるのであろうかという期待が自分を大学へ行きたいと思わしめたのだと思う。

その期待は見事に裏切られた(もっとも、その理由は後でわかってくるのだが)。大教室で淡々と行われる講義は眠たい以外の何者でもなかった。難しい専門用語が飛び交う中で、何を言ってるのかわかんねーよというのが正直な感想であった。心は次第に教室を離れ、灰色の校舎の上の空を見上げながら“自分は今、何をすべきか”をずっと考えていた。難しい観念をもて遊んでいても何も進歩はないのである。自由にならねば、そして迷いを捨てねば何をしているのかわからない。それにしても総合科学部という所は——(!?)

総科は2年生になるときに所属コースを決める。つまり1年生の1年間は猶予期間である。総科の諷い文句は何でもできる学部であるという。だが裏を返せば何もできない学部なのである。本人が自分のやりたいことを明確に持っているのであれば“何でもできる”学部であろう。しかしなんとなく総科に

来ただけの人間は“何もできない”ままに、またなんとなく卒業してしまうのであろう。

これは学問(勉強という言葉は好きではない)のことだけでなく生活上においてもそのような風潮が総科生には無きにしもあらずである。だいたい、自分は〇〇学なんていう学問を本当に学びたいと思っているのだろうか?要領よく優をとるより、つまらないと思えば不可で結構という考えは現実には不利である。でも本当はそれが正しいのではないだろうか?自分の価値観とどちらが大切なのか?

入学して早々にこのように思った僕はオリキャン(懐しい!)のフェローの先輩に話をきいてもらったが、先輩もどちらかという現実肯定主義の人であった。精神的な意味で右往左往しながら1年たち、コースを決める時がやってきた。結局地域文化コースで、また後で群を変えることになるのだが、まあこれは正しい選択だったと思う。2年生、3年生と進むにつれ自分は何の学問がしたいのかはだんだんと見えてきたようである。今は迷いもなく(?)卒論に取り組んでいる。結果から言うと、総科に来たことは正解であったと思う。但し生活面では——?これも総科生のはまりがちなどつぼからはなんとか逃れたとは思っているが。

けれども、今振り返ってみると、混沌とした4年間だった。新歓コンパ、オリキャン、大学祭の出店(総科62お好み焼だったかな?)、沼田での研修、フェローだった半年間もあった。半地下研究室で騒いで追い出されかけたこともあったな。プレハブの研究室を閉鎖されかけたことも…。3年生あたりになると、行事からも縁遠くなりそういうノリはなくなってきたが、代わりに学問の方は充実してきたと思う。やはり楽しい思い出というのは1・2年生時代に集中しているようである。なにしろまだ若かった!?(これは否定できない。)

後輩の皆さんへ。大学で学ぶことは誰でもできる。でもそこから問うことがないのならば大学へ来た意味はないのである。その問いかけはたった1つでいい。その1つを必死になって探して下さい。そして必死になって(?)遊んで、楽しい思い出を沢山残して下さい。

## 言葉の錬金術師達はソフトボールに涙する!!

外国語コース3年  
加藤純悟

私が外国語コースに入って二年近く過ぎた。一年目はとにかく忙しく、週に空きコマが三つしかなかった。特に驚異だったのは木曜日で一コマ目を除いて残りの三コマが、聴取法、表現法、会話と全てネイティブ・スピーカーによる演習といった具合だった。これではいくら怠惰な私でさえ勉強せざるを得ない状態に追いやられていた。そして今日、二年目の外国語コース暮しも残りわずかとなってようやく重大な盲点の存在に気付いた。それは、私自身が自コースの教官をまったくとっていい程知らないということだった。

外国語コースには五十数名の教官がおられる。01生を迎えようやく学生の数が教官の数を上回るといったように、英語、フランス語、ドイツ語、その他の言語を通じ、教官の数が豊富である。教官が多いというのは、それだけ多方面に渡り様々な専門的な分野の指導を受けることができるので非常に良いことだと思う。その一方で、多すぎるというのも困ったもので、あまりの豊富な品揃えに迷ってしまい何があるのかわからなくなるといった贅沢な悩みが生じてくる。私と同様外国語コースの他の学生の間では、その教官の豊富さについてゆげずに、自コースの教官の顔、いや名前すら知らないでいるといった短所がある。

最近になって、外国語の教官及び学生はそういった短所を克服するために動きだした。具体的には去年から始まったソフトボール大会である。そもそもソフトボール好きの教官から試合をやらないかと誘われたのがきっかけである。それが回を重ねるごとに、参加者も多くなり、学生とのコミュニケーションを深めるのに役立っている。コース柄、男子よりも女子の数が圧倒的に多いため、多少の支障はあるものの、院生も含め助手まで呼んで毎回皆んな楽しんで試合を盛り上げています。試合の方はというと、なかなかレベルが高く、教官方の年齢を感じさせない動きにいつも学生が圧倒されています。学生チームが未だに教官チームにまともに勝ったことがないという事実からも、いかに教官が上手いかよくわかると思います。ソフトボール後の飲み会では、普段教室では絶対に見られないような教官方の素顔を

垣間見ることができ、一層教官方への好意も深まり、コミュニケーションに花を咲かせています。日頃の運動不足やストレス解消のためにも、今後ますます多くの教官方や学生の参加が期待されています。

また、学生の間では、自コースの教官方をより深く知るために、各教官方の研究分野を載せた用紙を作成しています。せっかく多勢の教官方がおられるのに知らないまま過ごすといった短所を少しでも解消できれば良いと思っています。教官方とのコミュニケーションの足がかりになればと、その完成を急いでいます。

その他にも、外国語コースでは3回生が中心となって企画、準備、実施する夏期英語集中キャンプを行なっています。このキャンプは英語の能力を向上させるのを目的として、三日間日本語厳禁の生活を送るというものです。毎回大勢の教官方をお呼びして参加していただき、去年三回目のキャンプを行ないました。非常に有意義なキャンプができ大成功でした。

このように、外国語コースでは様々なイベントを通じて、教官方と学生とのコミュニケーションを深めています。これからも、学生の積極的な姿勢と教官方の御協力を基に、外国語コースが活性化し、ますます魅力のあるコースになって欲しいと思います。

「時々、落ち込むことはあるけれど、私はこの外国語コースが好きです。」



## 四番目の魔道士

山本みつね

風は激しく、海は訪問者たちを拒むかの如く荒れ狂っていた。

「此処から先は、この船じゃあ、あきませんぞ！」

水夫の声も、叩きつける風がちぎられる。

季節外れの嵐となった海の只中で、さほど大きくない船は頼りなく波に揉まれていた。大抵の海には慣れっこの管の水夫たちが、青い顔で行き来する。その中で、船縁に佇む一青年ばかりは、殆どまじろぎもせず、黒い海の向こうを見つめて動かなかった。

すっかり薄汚れてしまった白いローブの裾が、強い風に音をたてる。

「カルキ」

誰かが、側に寄ってきた。振り返った青年の目が、つと和んだ。

「シュリーか……」

「ひどい荒れになったわね」

こちらは青みのかった草色のローブをまとった女性がひとり、青年の横に立った。

「これから先は進めないって、水夫たちが青くなっているわ」

「ああ……だけど、そもいかない」

青年が苦笑したところへ、また別の声が入ってきた。

「おい、カルキ、どうする？ どうやら、ヴィラバドラーはオレ達の訪問が気に入らんようだぜ」

真っ赤なローブに身を固めた青年が、少々危なっかしい足取りで近付いてこようとしている。女性が走り寄って支えると、その赤ローブの青年は土気色の顔にべっとり脂汗をにじませながら、それでも笑顔を見せた。

「はは……悪いな、シュリー」

「大丈夫なの？ ガルーダ」

「面目ないね……」炎使い、と恐れられるガルーダ様が、船酔いとはな……奴らが見たら、さぞかし笑うだろうよ……」

そんなやりとりをよそに、カルキ青年は、煙るようなスミレ色の瞳を、再び海の向こうに据えた。視線の先に、島があった。広い海では全く取るに足りない、小さな島だ。だが……。

「……仕方ない。此処から先は、小船を下ろしてもらって、僕らだけで行こう」

「大丈夫かしら……」

「元々、僕らのやろうとしていることは、水夫たちには関わりのないことだ。巻き添えには出来ないだろう？ 僕が、小船を下ろしてくれるよう、頼んでくる」

カルキ青年は静かに言うと、船縁から離れた。

ヴィルシャナ島は、ちっぽけな島である。

歩いて二十分もあれば横切ってしまうほどの面積しかない上に、申し訳程度にへばりつく草木の他は岩と砂ばかりという、殺風景な島である。だが、このほんの小さな島の何処かに住むと言われているひとりの黒魔道士を捜し出せた者は、これまでにひとりとして存在しない……

「白き魔道士、カルキ、大地の子、シュリー、炎使い、ガルーダ、この三人の若い、しかし三人ながらに当代一流の能力を持った魔道士たちが、ある邪悪なる魔の一族との戦いに立ち上がって、今日で六日目であった。三人は全力を尽くしてはいた。しかし、彼らの力は、一族に対抗は出来ても、その暴虐の支配域を押し戻し、一族本来のすみかに逼塞せしめるには、いまだ不足であった。三人のリーダー的存在カルキは、五日目の晩にひとつの決意をした。彼は、自分の異名のままだに己が永遠の敵と見做してはばからなかった黒魔道士ヴィラバドラーを、同志として迎えようと考えたのだ。

黒魔道士ヴィラバドラー——三年前、当時黒魔道士として最強最大の力を持つと自他共に認められていた邪悪なルドラを葬った魔道士である。以来「ルドラ殺し」との異名を冠されているのだが、不思議なことに、この魔道士が何処で生まれ何処でどのようにして育ったのか、誰ひとり知らなかった。ルドラを倒したことで一躍その名を知られるようになった後も、この魔道士は、他者にその素顔を知られることのない奇妙な魔道士であった。というのも、ルドラ亡き後要を失って右往左往する黒魔道士たちの上に立つでもなく、姿を消してしまったからで、ただ噂ばかりが、彼がヴィルシャナ島に引きこもって黒

魔の術の研究三昧の日を送っていることを、嘘か誠か、伝えているのである。

「どうせ、また、目くらましか何かでオレ達を辿り着かせまいとするに決まってるぜ」

陸に上がったことですっかり顔色を取り戻したガルダは、そう毒づく、今やけろりと凧いでしまっている海を、いまましげに眺めた。彼らは、シュリーの力を借りて荒れる波を鎮め、やっとの思いで先刻この浜に小船を寄せて上陸を果たしたところであった。嵐は人為的なものだったようで、その術を破る為にシュリーは疲労困憊し、今はカルキに支えられてようやく立っている。

そのシュリーが、ふっと指を上げた。

「どうやら、そうでもなさそうよ」

シュリーの指した方を何気なく振り仰いだカルキとガルダは、ハッと目を凝らした。

小高い岩場の上に、人影があった。黒い雲が切れ、日の光が地上に注いだ。一瞬だが、その光が、岩場に立つ人影を余すことなく照らし出した。

黒衣に身を包んだ男であった。年の頃など、遠目ゆえにしかとは知れないが、風に晒されている髪の毛のつややかな黒からすると、まだ十分に若いとは思われた。鋭い視線が、砂浜の三人の上に注がれていた。

ヴィラバドラ……。

三人は、今までにヴィラバドラの容姿など、噂にも聞いたことはなかった。だが、その男を見た途端、彼らはそれがヴィラバドラだと直感した。証拠など必要なかった。ただ、わかってしまったのだ。

「—— 待って！」

だが、姿を見せたのも束の間、黒衣の男はあっという間に身を翻し去った。シュリーが思わず発した声に、他のふたりも我に帰った。

「シュリー、ガルダ、僕につかまれ！」

カルキは素早く印を結ぶと、口早に呪文を唱えた。

「ABILO・FONICA・ARSU！」

ふわり、と足が地を離れた、と思った次の瞬間にはもう、三人は岩場を見下ろせる上空まで一気に舞い上がっていた。

「—— あそこだ！」

ガルダが目ざとく指差す先で、さっきの男は今まさに岩陰にすっと入り込んでゆくところであった。三人もすかさずそこへ降り立つや、後を追って岩陰に駆け込んだ。

—— 足が宙を踏む!?

あっと思った刹那、三人は闇の中を転げ落ちてい

た。

だが、さほど長い時間ではなかった。

意外にふわりと下に叩きつけられるが早いか跳ね起き、辺りを見回したカルキは、ほの明るい闇の向こうに端然と座している件の男に、すぐに気付いた。

「ヴィラバドラ……？」

どういう空間なのか、声が奇妙に反響する。男は、閉ざしていた目をゆっくりと開いて、カルキを見た。鋭いが変に尖ったところはない漆黒の瞳と、煙るような、しかし一本芯の通ったスマイレ色の瞳とが、静かにぶつかり合った。

「ヴィラバドラ……だね、君が」

カルキはもう一度口にしたが、それは既に間ではなく、単なる確認であった。相手は頷くことすらせず、カルキを見つめて動かなかった。見てくれは至極若いのに、何処か見る者を畏怖させる威厳を具えている魔道士であった。

「ヴィラバドラ……僕の名はカルキという。後ろはガルダ、そしてシュリーだ。僕らは……君の力を借りたくて、此処へ来た」

背後でガルダとシュリーもまた身を起こして見ているのを感じながら、カルキは語り始めた。

「今、この人間世界を危機に陥れている魔の一族のことは、君も知っていると思う。僕らは奴らと既に五日五晩戦ってきた……だけど、僕ら三人だけの力では、奴らを封じることはおろか、早晚敗北を喫することになるだろう。ヴィラバドラ……君は、強大な力を持つと噂に高い魔道士だ。いや、今現にこうして君を見た僕は、噂が真実だと確信している。どうか、君の力を貸してほしい。あの邪悪なる一族を、本来の居場所たる魔世界に封じ込める為に」

黒魔道士ヴィラバドラは、カルキの言葉を聞き終えると、不可解な笑みを見せた。そして、かたわらの机に据えられた水晶球に手を置いた。

「—— かの一族に向かってゆくなら、私は確実に死ぬ」

やや低めの、濁りのない声が、やはり奇妙に反響した。カルキは、ずっと自分の顔から血の気が引くのを自覚した。

「それは…… どういう……？」

「この水晶球に訊いてみたのだ。かの一族に戦いを挑めば、私を待つのは死の一字のみ」

「だから—— 嫌だったのか、ヴィラバドラ!？」

激発したのはガルダであった。カルキを押し



け、殆どつかみかからんばかりに、彼はヴィラバドラに詰め寄った。

「オレはな、元々ルドラ殺しの貴様に力を借りるなんて大反対だったんだ。だけどオレ以上に黒魔道士なんて人種を厭い抜いてるカルキが、それでももうこうするしかないって、下げたくもない頭を下げると決めた以上、オレだって何をか言わんや、だったよ——それを、貴様、死ぬのがわかってるから奴らに戦いを挑むのは嫌だと吐かす気か!？」

「死ぬとわかっていて、わざわざ命を捨てにゆくあほうが、そうそういるものかな」

「何だと、この——」

「やめて！」

シュリーが必死で引き止めなければ、ガルダはそのままヴィラバドラに殴りかかっていたに違いない。カルキはその間青ざめた顔でじっと下を向いていたが、やがて、声を絞り出した。

「わかった……」

かすれ切った声だった。

「わかった……もう頼まない」

「……そこを真つすぐ行けば、お前たちが小船を着けた浜に出る」

ヴィラバドラは無表情に指で示すと、それなりそっけなく目を閉じてしまった。カルキはゆっくりと立ち上がり、行きかけたが、不意にこみあげてきた感情を抑え切れずに振り返り、ぎゅっとヴィラバドラを睨みつけた。

「僕が馬鹿だった——少しの間でも、黒魔道士なんかに望みをかけた僕が、馬鹿だったんだ！」

ガルダさえ度肝を抜かれたほどの激しさで言葉を叩きつけざま、カルキは駆け出した。ガルダが三瞬遅れて後を追う。シュリーもまた彼らを追って二、三歩行きかけたが、つとその足を止め、ヴィラバドラの前に戻った。

「……まだ何か言い足りんことがあるのか」

目は閉ざしたまま、ヴィラバドラが唇を開く。

シュリーは、静かに頷いた。

「わたしは、あなたにお礼を言いたくて残ったんです、ヴィラバドラ」

彼女の言葉は、充分に黒魔道士の意表を衝いた。彼は目を開くと、まじろぎもせず彼女を見つめた。

「礼だと……？」

「ええ。わたしは、あなたのその気持ちだけでも嬉しかった、と」

「気持ち？ 何のことだ」

「あなたは言ったわ——『水晶球に訊いてみた』と」

ヴィラバドラの瞳が、ごくわずかにたじろぎを見せた。

「あなたは、少なくとも、かの一族に対して自分が何か為すべきだと思ってくれた、だからこそ、訊いてみたのでしょうか？ いえ、否定しないで。そう信じさせて。あなたは、あの邪悪なルドラを倒した人。そのルドラの後を襲って黒魔道士たちの上に立つような愚かなことをしなかった人。わたしは、あなたの気持ちだけでも嬉しいです。わたしたちは、あなたの分まで、やれるところまで、やってみるつもりです。あと——それから——カルキやガルダを悪く思わないでください。ええ——わたしの言うことはこれだけです。さようなら、ヴィラバドラ。どうか、わたしたちの分も、生きてください」

そっと頭を下げ、シュリーは身を翻した。ひとり残されたヴィラバドラの表情を、彼女は恐らく一生の間、知ることはなかった。

「何をしてたんだ、シュリー？」

外へ出た彼女を迎えたのは、ガルダのいら立った声だった。彼女は微笑んだ。

「彼に……ヴィラバドラにお礼を言っていたの」

「礼!？」

ガルダは呆気にとられ、次いで怒り出した。

「あんな奴に何の礼がいるってんだ!？」

「あなたたちは気付かなかったのね……カルキ、元気を出して。あなたは馬鹿なんかじゃないわ。あなたの目は、間違っってなんかいなかったわ」

砂浜に出てからというもの唇をかんで黙りこくっていたカルキは、シュリーの言葉に少し顔を上げ、力なく彼女を見やった。

「思い出して。彼は言ったでしょう、『水晶球に訊いてみた』って。彼は少なくとも、かの一族と戦おうと思ったのよ。でなければ、初めから訊きもしないわ。カルキ、ガルダも、わかってあげて。あなたたちはもう、死も辞さない決心でいるから思い至らないかもしれない。でも、殆どの人にとって、死は、乗り越え切れない壁なのよ。ヴィラバドラは、そこを越えられなかっただけなのよ」

「オレはな——奴らに逆らわなきゃ命永らえられんと思ってるその浅はかさが気にいらなんだよ！」  
ガルダは吐き捨てた。

「たとえ今一時生き永らえたって、奴らの世の中になっちゃったら自分もおしまいだってことに気付

かないんだよ！ 奴らが見逃す筈もなけりゃ、奴らから逃げ切れる筈もないんだからな！」

「——その通りさ、けっけっ」

突如、カンに触る笑い声があがった。ギョッととなる暇もなく閃光が落ちかかり、カルキを、そしてシュリーを貫いた。

「き—— 貴様ら、いつの間に——」

ひとりきわどくも攻撃を避け得たガルダは、愕然と周囲を見回した。彼らは囲まれていた。空中にも、海にも、陸にも、ひとつ切りの目を不気味に光らせる魔物たちが溢れ返っていた。

「くそっ、何だって急にこんなにわんざか……」

「お前らがちょろちょろ目障りなのでこの際ひと思いに叩き潰せと、かの方より御下命があったのさ」

背中に黒光りする羽を負ったひとつ目魔物が、上空から小馬鹿にし切った笑いを放ってよこす。

「人間族の分際で我ら一族に歯向かうからさ。

けっけっけっ」

ガルダは歯ぎしりした。足許では、幸い軽傷だったシュリーが、深手を負ったカルキに懸命の治療の術を試みているが、思うようにはゆかないらしい。ガルダは一気に精神を集中し、印を切った。

「DOEKU・KAST・KARSU!!」

空中の一点を中心に、巨大な火球が爆発した。空に群れていた魔物の一団が、一瞬で消滅する。ガルダは印を替え、別の呪文を唱えた。炎の龍が凄まじい勢いで天に駆け昇り、走り抜け、魔物たちの群れを斬り裂いた。だが、何しろ相手の数が桁外れに多い上に、倒されてゆくのは雑魚ばかりである。やがて、ひとつ目一族の中でも上位階級に属する羽ある部族どもが、彼の疲労を見透かしたかのように攻勢をかけてき始めた。

「くそっ——」

ガルダは印を結び直すと、一転して守りに回った。白熱した輝きが三人を守る。いつしかガルダのこめかみを、ひと筋、ふた筋と、赤いものが伝い落ちていた。

「シュリー、カルキは——」

「何とか……もう少し……」

殆ど即死に近かったカルキを回復させようとしているシュリーの額にも、汗が無数に浮かんでいる。ガルダは気合を入れ直し、いや増す外からの圧力に耐えて結界を張り続けた。

が、人ひとりの力では、やはり限界があった。

「——ガルダ!?」

シュリーが気付いて悲鳴をあげると同時、ガルダの体がぐらりと傾いた。結界が光を失い、魔物どもが喜悅の叫びをあげる……

意識の糸が切れ、地の底へ墜ちてゆく感覚は、だが、確かだが柔らかな衝撃に会って、止まった。

ガルダはかすむ目を開けた。黒い双眸が、彼を見下ろしていた。細く、鋭い、だが何処かしら温かいものを秘めたまなざしだった。自分がその人に受け止められたことを、ガルダはぼんやりと悟った。

魔物どもは攻撃してこないのか……それとももうオレは死んでしまって、今オレを支え見下ろしているのは、死の国の人なのか……余りの静けさにガルダは訝り、そんなことを考えた。彼は辺りを見回そうと身じろいだ。

「案ずるな。結界は引き継いだ。少し休むがいい」  
その人が口を開く。

ガルダは、耳を疑った。彼は何度かいたずらに唇を動かし、そして、遂に、その名を声にした。

「ヴィラバドラ——ヴィラバドラ！」

その人はかすかに笑うと、ガルダを砂の上に横たえた。

「ああ、ヴィラバドラ——」

「お前はその白魔道士を早く治してやれ」

何か言いかけるシュリーを制し、ヴィラバドラは再び立ち上がった。ひとつ目一族は、突然現われたこの助っ人に少なからず面食らっていた。その助っ人は、表情ひとつ変えずに破られかけた結界を引き継いだばかりか、今まで以上のそれを作り出し、しかも印も結ばずに平然とそれを維持しているのだ。

「けっけ、小賢しい人間め——」

気を取り直し、更なる攻撃の令を下そうとした羽ある部族の長は、しかし、その手をふと惑わせた。その助っ人魔道士が、自分を守る筈の結界からすつと歩み出、無防備の姿を彼らの前に現わしたのである。その意図を測りかね、魔物たちは戸惑ったように動きを止めた。

ヴィラバドラの右手が、いとも無造作に上がった。

「NENEMU・AR・ARIA・KUKU・ZU・NEI・KAR・MONSTSU」

ごくそっけなく呪文が終わると共に——

風が吹いた。

死の風であった。

茫然と見守るガルダ達の目の前で、あれほどに空を、海を、陸を埋め尽くしていたひとつ目の魔物たちが、声もなく、ばたばたと墜ち、倒れ始めた。

命の灯を吹き消され、そうなのは元々人間世界のものでない彼ら、海にも地にもその抜け殻は留まらず、次々と消滅してゆく……際限なく、静かに。

かろうじて死の風に抵抗し得たひと握りの魔物も、半ば戦意を喪失していた。人間、しかもたったひとりの人間相手にこんな醜態を晒すなど、誰が予想しただろう!?

「おのれ——おのれ人間!」

羽ある部族の長も、生き残っていた。彼は、畏れ多くも一族全ての上に立つ長直々の命令で目障りな人間どもをひねり潰すべく沢山の魔物たちを率いてきていたのだ。それが——!! 彼は憤怒と屈辱にそのひとつしかない目を恐ろしい色で満たし、奇声と共にヴィラバドラ目がけ一気に舞いかかった。

ヴィラバドラは、ただ右手の指を一本、襲いくる魔物に差しつけた。

何かに引っかかったように、魔物の動きが止まる。

「NEIA」

魔道士が口にしたのは、ただその一語だった。次の瞬間、羽ある部族の長の顔に、信じられぬと言いたげな表情がよぎった。空白がすぐ後を埋めた。そして——この世に存在することを許されず、その姿が消滅した。

残った魔物たちは、ヴィラバドラにゆっくりと見回されると、抑え切れぬ恐慌に陥った。

「お——覚えておれ、人間っ!」

遂に。

誰かの悲鳴同然の台詞をきっかけに、ひとつ目の魔物たちは先を争って姿を消していった。

島は、元の静けさを取り戻した。何事もなかったかのように、波が砂をさらった。

「——あ」

シュリーが驚いて止める手を払って、完全には傷癒えておらぬカルキは立ち上がった。彼は砂を踏み締めながら、端然と背を向けて行む黒魔道士に歩み寄っていった。

「ヴィラバドラ……」

かける声がかすれた。

「ヴィラバドラ、君は……」

黒魔道士の返事はなかった。カルキは更にその背に向けて、一步を踏み出した。

その時、その黒魔道士は砂の上に崩れ落ちた。

シュリーとガルダはハッとして立ち上がり、倒れた黒魔道士に急いで馳せ寄った。三人の覗き込む目に、土気色にやつれ果てた顔が映った。

「構うな……休めば戻る……」

目を閉ざしたまま、殆ど声にならぬ声で黒魔道士は呟いた。

「ヴィラバドラ……あなた……」

「皮肉だな」

シュリーがそっと頬に手を触れると、黒魔道士は微笑した。

「私は……ルドラを倒したいばかりに、闇世界の王と契約を結び、力を手に入れた……ルドラを葬りさえすれば、私はそれで満足だったのだ……だが、そのルドラを倒した力が、お前たちを呼び寄せ、私を死に向かわせることになるとはな……」

「契——約だって!？」

カルキのギョッとしたような大声に、ヴィラバドラはまた苦笑した。

「闇族や魔族との契約行為に白魔道士のお前が拒絶反応を示すのも無理はないが……契約とは、隷属と等価ではない。いや……他の黒魔道士にとってどうかは知らない。だが、私は、少なくとも、今持ってもいないモノで取引をしたわけではない……」

言って、彼はうっすらと目を開いた。

「今持ってもいないモノ、って何のことだ？」

つい釣り込まれるようにガルダが問いかけると、ヴィラバドラは三たび苦笑を閃かせて答えた。

「将来の隷属……つまり、早く言えば、自分の死後の魂とかいう代物のことだ」

「じゃあ——お前は一体何を闇の王に差し出したんだ、ヴィラバドラ？」

「知ってどうする？」

おかしそうにヴィラバドラはガルダを見上げた。ガルダは返答に詰まり、顔を赤らめた。

「……私は、ルドラさえ倒せば、それで良かったのだ……」

そんなガルダからカルキ、そしてシュリーと目を移しながら、ヴィラバドラは穏やかに言葉を紡いだ。

「私は、全てを奴の為に一瞬にして奪われた。両親も、祖母も、兄も姉も、家も、故郷も、何もかもだ……だが、何より許せなかったのは、それが、奴にとっては、いちいち数えるのも覚えておくのも面倒な日々のたわむれのひとつに過ぎなかったということだった。そう……奴にとっては、私が失ったものなど、路傍の小石ほどの値打ちもなかったのだ。奴は、私から奪ったものどころか、私から奪っていったことそれ自体すら、意識しようとしなかったのだ。」

……だから私はルドラを殺した。奴が最も手放した  
がらなかったもの……命、魔道士としての力、それ  
に伴う“声望”と権力、そういったもの全てを一度に  
奪うには、それしかないと思った……」

そこで一旦、彼は黙り込んだ。喋り過ぎて疲れた  
のかもしれない。三人の魔道士たちは、息を潜  
めるようにして、彼の次の言葉を待った。

「……その為だけに、ルドラを殺すその為だけに、  
強大な力が得られれば良かった。それさえ済めば、  
後はもう、生きる必要も感じなかった。そう……命  
だよ。私は、私自身の命を削って魔力に換える契約  
を、闇世界の王タルガルと結んでいるのだ」

三人は喉を詰まらせた。咄嗟に、言葉が出なかつた。

「……案ずるな。まだ幸い残金はある……あと四、  
五日なら、役に立てるだろう」

「ヴィラバドラ、僕は……僕は……」

カルキは胸を押さえた。傷の痛みなのか何なのか  
よくわからない痛みが、静かに彼の胸を浸しつつあつた。  
熱いものが、頬を伝った。

「何も言うな。もう決めたことだ」

ヴィラバドラはそっけなく目を閉じかけたが、ふ  
と、あほうが四人になったな、と呟いて、笑った。



前回同様、魔道士ネタを引延ばしてしまいました。が、  
今回は初の“主人公の名前が出る小説”でもあります。  
次回？ そんな先のことわかりませんが(笑)。

ところで前回ですが、私の作品世界での魔術(魔道)  
には善悪はありません。一般に夏の結果せむらふと思われ  
ているものを“黒”と称しますが、だから“黒魔道士”が  
善悪とは限らない世界なのです。善悪は御者の心が次第  
第、フーことでする。その辺御了承願います。

(はまた次号にて……。 (み)

# 平成 2 年度 就職内定企業名

平成 3 年 3 月 15 日現在

地域文化	社会科学	外国語	数理情報科学	物質生命科学	自然環境研究	生体行動科学
日立中国 ソフトウェア 日産サニー広島 鹿島建設 いずみ 三洋電機 丸 都市環境研究所 三越 ヤマハ発動機 アメリカン エキスプレス 人材派遣会社 ファコムイタック 広島ホームテレビ 広島ソフト エンジニアリング 天満屋 日本交通公社 NHK 日本電気 ソフトウェア	伊藤忠商事 東京海上火災保険 中本総合印刷 広島銀行 日本板硝子 シャープ 九州日本電気 ソフトウェア アメリカン エキスプレス サッポロビール 松下冷機 大日本印刷 そごう JR西日本 広島総合銀行 中央出版 ナルデック 日立情報 システムズ 中国日本電気 ソフトウェア 松下電器産業 日立家電販売	高島屋 日立製作所 山一証券 大日本印刷 NHK マツダ 全日空 三越 松下電器産業 福武書店 キューブ・システム ノエビア	住友銀行 N T T 沖電気工業 三洋電機 日本IBM PFUソフト ウェアラボラトリ 日立中国 ソフトウェア 松下電器産業 情報システム 広島研究所 NTTデータ通信 きんでん 富士通 日立製作所 シャープ	大日本印刷 ワン・ウィル クラレ 松下電器産業	日本道路 九州日本電気 カゴメ 第一学習社 三井信託銀行 大和ハウス工業	アシックス カプコン アサヒビール 大和証券 P & G ダイナウェア リクルート コンピュータ プリント リクルート 名古屋テレビ 医療法人 養育院病院 日本電気 日本ユニシス ローランドDG 松下電器産業 大日本印刷

# 平成 2 年度 卒業予定者進路状況

コース 区分	地域文化	社会科学	外国語	数理情報科学 (情報行動科学・ 環境科学を含む)	物質生命科学	自然環境研究 (環境科学を含む)	生体行動科学 (環境科学を含む)	卒業予定者 合計
卒業予定者数	24	29	15	27	22	27	26	170
進学希望	3	1	3	8	16	11	3	45
公務員		5		1		9	1	16
教員				2	1			3
企業	18	23	12	15	5	6	17	96
その他	3			1		1	5	10

# 特別研究論文題目紹介

## I 卒業論文

コース (指導教官)	氏名	論文題目名
情報行動科学		
(磯道)	小牟田 隆	ファジィ理論を応用した学習機構の構築
(安藤)	森 裕子	ウナギの腸におけるイオン輸送調節機構
環境科学		
(於保)	大野 哲二	広島県湯来地域における中-古生層中の小褶曲構造
(保田)	沖原 修	サンヨウアオイに含まれる揮発性成分の地理的変異
(阿賀岡)	三井 俊希	曲面上の測地線およびその幾何学的意味についての考察
地域文化		
(レブイ・アルヴァレス)	木村 明治	日本とフランスにおけるビデオテックスについて —システム形態の差異と利用者端末の位置付け—
(原正)	沖田 憲二	自然観研究
(戸田)	黒木 美香	女性・性・自然—「水」を通して—
(古東)	杉原 由香	九鬼周造研究—「九鬼周造」の構造—
(樫原)	廣川 恒志	ウルトラセブンの真価
(佐竹)	山本 祐一	贅についての一考察—系譜と変遷を中心に—
(志邨)	阿部 葉子	19世紀後半のアメリカにおける婦人参政権の成立—西部の女性は新しい女だったか—
(村上)	伊藤 多喜子	農村家屋の構造と変容—東広島市西条町寺家の事例—
(戸田)	大田 麻里	宮廷人の生活—ヴェルサイユの儀礼—
(藤井守)	上水流 久彦	道教研究—民間信仰における道教とその神々の役割—
(古東)	坂元 聡	「神秘主義」
(志邨)	白枝 尚子	合衆国における青年の麻薬問題
(古東)	鈴木 克始	丸山圭三郎と私想
(嶋)	田中 文	「中国の家族」
(志邨)	塚田 和子	アメリカ大統領選挙におけるテレビ・メディアの影響
(陣崎)	福島 真理	フィリップ・ロスとユダヤ人コミュニティ
(佐竹)	宮崎 浩	平安初期御霊会についての一考察
(嶋)	向井 かすみ	韓国の氏姓制度における本貫について
(戸田)	椋田 彩子	モラリスト、レーモン・ラディゲについて
(米田)	森 直子	イギリス近代音楽の黎明—作曲家バーセルを中心に
(金田)	森田 智子	美的配色による快適空間—色彩実用の現場から—
(山尾)	矢野 泉	東南アジアにおける農業の近代化 —「緑の革命」期以後の農民・農村問題の諸相—
(園府寺)	山口 佳代	レンブラント研究
(友田)	山本 康二	イギリス修道院解散に関する一考察

社会科学			
(森利)	足立	勝司	「英領インドにおける代表制の論理」～1928年『ネルー報告』を中心にして～
(秋葉)	石丸	睦子	女性のライフスタイルと家庭内役割
(舟場)	今田	浩	『大都市圏の居住・就業構造と都市計画』－広島都市圏の用途地域データベース作成と解析－
(秋葉)	大谷	栄子	「現代生活とコミュニケーション・メディア」
(伊藤護)	大段	茂樹	自然公園制度の検討－保護・利用の現状とあり方をめぐって－
(芝田)	岡本	千恵	宗教と政治の関係に関する一考察－創価学会と公明党の関係を中心として－
(秋葉)	海住	隆雄	魅力ある都市景観の実現へむけて
(森利)	柿本	美佐	1980年インド連邦F B完選挙分析
(芝田)	河野	哲也	「原水爆禁止運動の2つの路線」に関する一考察
(伊藤護)	佐藤	秀之	リポート開発の地域社会に与える影響と課題
(中達)	下川	亮子	「広島市における中国帰国者の受け入れについて」
(中達)	下野	寿子	「中国帰国者の日本定着とその問題点－広島市を中心に－」
(岩田)	田丸	光	I N F条約交渉の一考察～条約交渉過程と成立要因について～
(富井)	戸敷	聡	製造物責任に関する一考察－不法行為責任と無過失責任をめぐって－
(岩田)	土井	理子	E Cにおける共同体・国家・地域の考察－E Cとフランスの地域政策を手がかりとして－
(舟橋)	土器	昭子	今日の女性解放における課題
(鯨坂)	田中屋	恵	「家事における性別役割分業の検討」
(鯨坂)	中田	勝彦	「地域社会活性化のための方策に関する考察」
(芝田)	永山	康二	「国立予防衛生研究所 新宿移転問題に関する一考察」
(岩田)	西岡	弥生	チリ革命再考～社会主義への平和的移行の考察～
(舟橋)	花木	直子	「メアリ・ウルストンクラフトの女性解放論」
(伊藤護)	星尾	裕子	景観問題とそれに関わる事例及び課題について
(中峯)	三浦	文	時計と水車の社会史－ヨーロッパと中国－
(舟場)	湊	啓一	「構造不況都市の再活性化－広島県因島市を例に－」
(舟場)	宮尾	佳道	過疎地域におけるリゾート開発の可能性－広島県佐伯郡吉和村を例に－
(安野)	山岡	さち子	大英帝国とヨーロッパ統合－戦後のチャーチルの政治活動を中心として－
(鯨坂)	山縣	真紀子	「現代社会と若者文化－若者文化は社会を変えるか－」
(森利)	横井	純代	『世界の屋根』の戦略的意味－現代に甦るシルクロード」
(安野)	利岡	純子	西ドイツにおける労資共同決定制度と経済民主主義
外国語			
(内藤)	安倍	香織	日本語とフランス語の人称表現について－その相違と翻訳上の諸問題－
(上原)	池内	文	Advertising as Persuasive Communication －A Comparative Study on American and Japanese Television Commercials－ 広告における説得行動－日米コマーシャルの比較研究－
(岩倉)	梶原	英二	Passive Constructions: A Contrastive Analysis of English and German (受動構文: 英独対照分析)
(マルズカ)	金子	真祐美	ON TRANSLATING JAPANESE LITERATURE: A STUDY OF NAOYA SHIGA'S INFLUENZA 日本文学の翻訳について－志賀直哉「流行感冒」の研究－

(小林ひ)	嘉屋 園 江	Contrastive Rhetoric: 'Comparison' Structure in American and Japanese Student writing (対照レトリック: 学生英作文「比較」構成における日米語の違い)
(山 田)	河 本 典 子	The Identifiability of Briefly Exposed English Strings and English Language Ability 瞬間露出英単語の認知度と英語力
(小野光)	小 早 川 満 代	日本語とドイツ語の対照研究～主題の問題を中心に～
(熊 沢)	柴 山 大	日仏における〈食〉の思想
(要 田)	飛 谷 美 帆	A Gentleman In Mist-霧の中の紳士像-
(安仁屋)	福 重 康 彦	「A STUDY OF ERRORS IN ENGLISH ARTICLES BY JAPANESE STUDENTS」日本人学生による英語冠詞の誤答分析
(リナート)	松 本 美 保	Refusing Requests and Invitations in English: Comparison of Native English and Japanese speakers. 英語を母国語とする人と日本語を母国語とする人の断り方に関する考察
(伊藤詔)	松 山 尚 美	WOMAN AND PURITAN SOCIETY IN HAWTHORNE ホーソーンにおける女性とピューリタン社会についての考察
(中 村)	森 本 美 津 子	The Cruel Treatment of Malvolio in <i>Twelfth Night</i> 「十二夜」におけるマルボリーオへの仕打ち
(内 藤)	吉 原 香 奈	フランス語と日本語における色彩表現について-黒と白を中心にして-
(前田英)	渡 辺 悠 子	創造としての言語
数 理 情 報 学 科		
(原 田)	青 木 博 司	形状保存条件を満足する補間手法の開発
(水 本)	阿 部 純 忠	複連結領域の周期母数の測定
(岩 上)	石 川 靖 久	可換環とその上の加群について
(板 野)	石 橋 朋 典	ハーン, バナッハの定理とその応用
(板 野)	磯 岡 淳	バナッハ, シュタインハウスの定理とその応用
(前田渡)	上 谷 裕 徳	コンビネータ論理における抽象化とその等号性について
(前田渡)	黒 木 智 子	グラフの彩色に関する研究
(久 保)	古 安 圭 介	マルコフチェーンとマルコフ過程
(小野寛)	嶋 田 徹 一	ラムダ計算とコンビネータ論理における型付け
(久 保)	曾 根 健 太 郎	マルチンゲールとその応用
(江 口)	田 中 和 良	リー群とリー環に関する研究
(原 田)	田 中 良 知	簡易手書き文字入力デバイスを用いた高品位フォントの生成法
(磯 道)	中 島 賢 治	自然言語解析
(正法地)	西 村 則 久	非線型回帰問題の研究
(前田渡)	布 川 克 則	オブジェクト指向プログラミングと型検査について
(水 上)	古 川 恭 治	ニューラルネットワークによる動的システムの学習と制御に関する研究
(小野寛)	堀 隆 一	直観主義的線形命題論理とその基本定理に関する研究
(正法地)	松 本 研 一	統計学の研究
(原 田)	道 上 秀 樹	曲面物体断面形状の安定な計算法
(江 口)	宮 本 麻 理	多様体とリー群
(原 田)	村 上 誠	EWS 上の 3 次元カーソルの実現
(阿賀岡)	村 上 将 彦	Gauss・Bonnet の定理について
(加 藤)	森 平 也 寸 志	[0, 1] 区間の連続像



(原 田)	森 山 真 光	自由曲面の滑らかな持続法に関する研究
(前田渡)	安 永 朋 生	ネットワーク・フロー問題のアルゴリズムに関する研究
物質生命 科 学		
(岡 野)	石 川 浩 三	中国産ニガキ科植物の成分検索とその成分の有用物質への変換
(宗 岡)	伊 藤 由 美 子	軟体動物筋を検定系として用いたラット脳生理活性物質の探索
(藤井博)	今 村 一 憲	アフリカ産ニガキ科植物の成分検索とその成分の構造変換
(大 林)	岩 本 敏 志	超流動ヘリウム・ラマン散乱スペクトルの温度変化
(渡辺一)	上 村 卓 也	無タンパク細胞培養下におけるニワトリ胚胸膜細胞の増殖
(豊 島)	金 山 満 彦	小麦葉緑体光化学系II遺伝子群 (psbA~psbN) の転写産物の光による制御について
(内 山)	北 島 健 二	ヒト骨髄性白血病細胞における外来性遺伝子の発見
(赤 堀)	黒 岩 繁 樹	光合成光化学系IIにおける第1、第2キノン受容体 Q <sub>A</sub> 、Q <sub>B</sub> 間の電子移動機構
(武田隆)	小 林 秀 樹	リン脂質-水系における相転移に伴う構造変化の研究
(天野實)	佐 野 多 紀 子	変態期アフリカツメガエル腸の退縮過程における細胞増殖の調節
(好 村)	高 橋 正 敏	サーファクタント-油-水系における構造形成
(深 宮)	大 道 昌 幸	日本産ニガキ科植物の成分検索とその成分の昆虫に対する摂食阻害
(高 島)	中 尾 健 治	Zr-Ni系水素吸蔵合金の吸蔵特性及び電池特性
(檜 原)	長 岡 善 典	Bi系酸化物高温超伝導体の赤外異常と超伝導性
(武 森)	西 田 尚 史	ウシ副腎ミクロソームの3β-ヒドロキシ- $\Delta^5$ -ステロイドデヒドロゲナーゼ、 $\Delta^5$ - $\Delta^4$ イソメラーゼの精製とその諸性質
(渡辺一)	宮 崎 達 也	ニワトリ胚強膜線維芽細胞の定常期培養上清中に見出される細胞増殖調節因子
(播 磨)	宮 武 稔	ダブルビーム光変調法による有機分子固体膜のキャラクタゼーション
(山 下)	宮 原 万 理 子	ペリレン誘導体を用いた有機p-n接合型太陽電池
(内 山)	吉 田 真 嗣	ヒト前骨髄性白血病細胞HL-60のTPA早期誘導遺伝子の機能
(松 田)	吉 野 浩 生	核子間相互作用における斥力コアの研究
(内 山)	由 見 里 恵	ヒト前骨髄性白血病細胞HL-60のTPA早期誘導遺伝子の塩基配列
(宇田川)	米 倉 千 秋	ロトン-ロトン相互作用のモデル計算
自然環境 研 究		
(根 平)	井 田 秀 行	西中国山地の山頂付近におけるブナ林の成立過程
(藤原祺)	伊 藤 誠 治	導波現象による蛍光光度法の高感度化とその環境試料への応用
(堀 信)	岩 崎 聖 司	宅地造成地における地形の人工改変とその特性について
(中 越)	太 田 陽 子	下蒲刈島における植生景観の変遷とその要因
(開 發)	岡 野 春 樹	TDR水分計の野外への適用
(佐藤博)	小 川 貴 明	長崎県鷲尾岳地すべりに関する研究-地下水流動と排水工との関わりについて-
(藤原祺)	折 田 晋	硫化カルボニル等の含硫温室効果気体の発生機構とモニタリングに関する研究
(栃 木)	加 藤 仁 志	広島県口和町大草地区における地すべり調査とその考察
(栃 木)	川 本 政 和	高知県大豊町大西地区における地すべり調査とその考察
(堀 越)	北 岡 祐 治	排水の生物学的浄化と再利用-特に窒素除去と関連して-
(林 七)	熊 野 優 子	アリ類の道しるべ物質の化学的研究

(佐田)	桑迫 敏	炭素星HD182040の分光学的研究
(堀越)	神頭 裕美	直接法による土壌微生物バイオマス測定を試み
(堀信)	河内 知幸	海砂採取にともなう地形変化
(林七)	塩見 純子	アゲハチョウ科アオスジアゲハの揮発性成分の検索
(於保)	鈴木 峰央	兵庫県明延地域における舞鶴層群の地質構造
(根平)	内藤 和明	稀少植物に関する生態学的研究—エヒメアヤメ個体群と生育環境—
(中根)	野見山 洋之	松枯れ地域および非松枯れ地域における、アカマツ葉上での酸性降下物質による酸性度の比較
(桜井)	福原世津子	一遺伝子突然変異エンドウ矮性系統の生長と細胞壁組成
(中根)	三島 慎一郎	松枯れ地域と非松枯れ地域における土壌塩類循環と pH緩衝能力の比較
(高橋史)	安田 雅俊	アカネズミ ( <i>Apodemus Speciosus</i> TEMMINCK) によるコナラ属堅果の摂食と運搬
(福岡)	山崎 洋一	広島市都市キャノピー層における気温・湿度分布
(福岡)	山根 高志	広島市におけるヒートアイランドの立体構造と都市キャノピー層の熱収支について
(倉石)	横田 幹朗	一遺伝子オオムギ突然変異矮性系統の遺伝子解析
(開発)	横山 卓生	榎川試験流域の河川流出特性
生体行動学		
(上里)	青木 修	心拍率バイオフィードバックに関する研究
(林春)	青山 和雄	認知的ヒューリスティックに関する研究
(重中)	石井 宣道	Ultrastructure of Heliozoan Axopodia as Revealed by a Newly — devised Fixation for Electron Microscopy (太陽虫軸足の微細構造—新しい電子顕微鏡用固定法による—)
(西村)	石井 道恵	青年期における身体満足度と自尊感情との関連について
(藤原武)	岩佐 雅紀	メッセージ処理中の Elaboration と大脳半球機能差に関する研究
(安藤)	上坂 敏弘	ウナギの腸からの生物活性物質の抽出
(杉本)	岡沢 志歩	ラットの弁別逆転学習における脳内電気活動
(生和)	岡林 尚子	スピーチ不安に関する実験臨床心理学的研究
(堀忠)	加藤 孝一	入眠期における脳波パターンと心理的体験との対応
(林春)	河野 卓司	プロトデピカリティに関する研究
(生和)	古賀 健介	時間不安に関する実証的研究
(安藤)	近藤 恭子	ウナギの腸におけるイオン及び水輸送の調節 (ノルアドレナリンの影響)
(新畑)	志村 尚巳	ランナーにおける血漿CPK活性値の変動について
(小林博)	杉岡 美保	アフリカマイマイ筋から単離した生理活性物質の構造と生物活性
(宗岡)	谷村 洋子	コナガニシ歯舌牽引筋を用いた生理活性物質検定法とその応用
(和田)	土路 恭子	ラットヒラメ筋の後肢宙づりに伴う組織化学的生化学的变化
(上里)	野田 裕子	児童の共感性に関する研究
(小林博)	原田 新	アフリカマイマイ中枢神経細胞に及ぼす神経ペプチドの影響
(武森)	原田 大輔	副腎ステロイドホルモン合成におけるプレグネノロンの代謝経路
(林春)	福永 弘樹	日系人のアイデンティティに関する研究
(難波)	松尾 晃	アルカリフォスファターゼ (ALP) 標識 avidin — biotin 法を用いたヒト組織・細胞内におけるウィルスゲノムの証明法 (in situ hybridization) への応用

(杉本)	三田	志穂	フローティングの反復体験の効果における生理心理学的研究
(堀忠)	山内	美幸	喫煙の覚醒効果に関する精神生理学的研究
(藤原武)	山田	実	先行刺激の処理様式と認知欲求が態度形成に及ぼす効果に関する研究
(重中)	山本	祐子	ユーグレナ運動に及ぼすカルモデュリン阻害剤の効果

## II. 修士論文

研究科 (指導教官)	氏名	論文題目名
社会科学		
(高橋進)	一色 哲	自由民権運動における政治と宗教の交錯—高梁基督教会の場合—
(永尾)	屈 迎春	芥川龍之介研究
(朝倉)	辻野 正人	教盛伝承考
(永尾)	磯辺 悌志	比喩表現の研究—川端康成の作品を対象として—
(永尾)	勝山 幸雄	夏目漱石研究
(金田)	田中 健	言語分析的現象学批判の検討 —トウゲーントハットのフッセル批判を中心に—
(金田)	古谷 可由	ニーチェの美学・芸術家形而上学
(高橋進)	山田 直人	ヴァイマル共和国初期のドイツ社会民主党—ゲルリッツ党大会(1921.9)の連合政策をめぐる議論を中心に—
(木村)	タン・アントニオ	A Case Study of The Toyota Motor Philippines Corporation (TMPC): The suitability of Japanese Management Practices トヨタ・フィリピン・モーター・コーポレーションの研究：日本経営方式の採用
(檜山)	葛城 明子	魯迅訳『域外小説集』の諸問題
(高橋進)	黒川 敬吾	キューバ革命の社会主義化過程—農地改革と農業計画化を中心に—
(永尾)	島田 智子	「語り」の研究—谷崎潤一郎の作品
(金田)	前田 淳子	アルチンボルド「ウェルトゥムヌスとしてのルドルフ2世」—皇帝の寓意表現について—
(上杉)	山中 英理子	伝記文学における—考察—リットン・ストレイチーの伝記について—
(陣崎)	山本 貴裕	The Modern American Jew's Struggle between Religiosity and Secularism 現代アメリカユダヤ人の信仰と世俗主義の相剋
(永尾)	路 玉昌	芥川龍之介の文体研究—文連接を中心に—
生物圏科学 研究科		
(山下)	岡崎 賢	光・電子変換機能性有機薄膜の構造と機能性
(中根)	木村 仁典	リモートセンシングデータを用いた植生区分—地形補正等を加えて—
(保田)	小西 道子	アリの種子散布に関する化学的研究
(松田)	酒井 保	SU(2)ゲージ理論でのフェルミオン効果を取り入れたインスタントンによるフェルミオン数非保存過程の散乱振幅の計算
(開発)	坂井 紀之	砂質土壌草地面における大気—地中間の熱・水分移動に関する研究
(山下)	瀬川 明宏	電気化学発光を利用する化学計測法の研究
(宇田川)	高梨 悟彦	カトルモノクロメーターの開発と酸化物高温超伝導体への応用
(坪田)	竹内 和久	海洋におけるアルミニウムの地球化学
(根平)	田中 真澄	人為的攪乱がアカマツ二次林の群集構造に及ぼす影響
(保田)	中村 惣一	マダラチョウ科のチョウの性フェロモンと配偶行動に関する化学的研究

(藤井博)	長澤	政幸	重い電子系化合物 CeNiSn, UPdIn の単結晶育成と物性
(佐藤博)	原	郁男	富士火山噴出物の結晶組織に関する実験的研究
(佐田)	平山	恭之	山口県徳山市須万地域における三郡変成岩(都濃層群)と弱変成古生層(錦層群)の変形構造
(檜原)	福田	豊	ウラン化合物およびセリウム化合物の核磁気共鳴
(高島)	松熊	訓子	銅酸化物高温超伝導体 $La_{2-x}Sr_xCuO_{4-s}$ , $Nd_{2-x}Ce_xCuO_{4-s}$ の水素吸蔵による物性変化
(舟場)	松本	礼史	都市的生活様式論からみた社会資本の整備計画に関する研究
(高島)	宮田	俊一	三元系ウラン化合物 $U_3T_3X_4$ の物質探索
(林七)	山口	真弓	花の香り成分の抽出分析法の研究—タイサンボクを中心として—
(福岡)	龍	絵理子	中国地方西部の大雨に関するメソ気候学的研究
(小林博)	太田	憲之	アフリカマイマイ神経節生理活性物質の単離・精製と生物活性
(内山)	太田	光栄	ヒト前骨髄性白血病細胞 HL-60 の分化に伴い早期に一過性発現を示す遺伝子に関する研究
(内山)	坂本	和也	ヒト前骨髄性白血病細胞 HL-60 の分化に伴う細胞内 DNA 結合性蛋白質の変化
(天野寛)	高倉	暁彦	アフリカツメガエル肝細胞の変態期における遺伝子発現制御についての研究—二次元電気泳動法によるタンパク合成パターンの解析—
(倉石)	鶴崎	健一	高等植物でのインドール酢酸生合成経路
(上領)	仁木	敏朗	非特異的脂質輸送タンパク質の生理的な役割について
(豊島)	福原	聡	光合成光化学系IIにおける光電荷分離に必須なタンパク質群の同定
(宗岡)	藤澤	祐子	Bioactive peptides in the anterior byssus retractor muscle of <i>Mytilus edulis</i>
工学研究科			
(正法地)	覃	涛	非線形回帰問題の研究—ヒトの成長過程の解析

# 信頼に足る若者たち

## —わが学部の就職状況—

田村 一郎

マラソンで優勝した若者の顔は、いつもさわやかで美しい。きっと、強い意志ときびしいトレーニングが、あの素晴らしい顔を呼び出すのであろう。二月は学内で、このいい顔に出会う季節である。卒論の自信作を的確に手際よく発表し、追い出しコンパでチョッピリ社会人らしい挨拶をする。卒業予定者達は、やはり、卒論と就職活動という二つの年輪を経て、自己発見と自信を手に入れるのだらう。

この若者達の人間的成長の裏には、もちろん、卒論指導教官及び就職関係の教官・職員の方々の並々ならぬ御指導と御努力があると思われるが、忘れてならないのは、暖かいOB・OGとの出会いや、また、面接を通じてここまで若者を人間的に育てて下さった企業・会社の人事担当の方々との出会いである。

毎年、厚生補導係の職員の方々の御努力下、「就職活動状況」という部厚いファイルが残されている。

解禁待ち中、指定校採用、縁故採用などと建て前の「壁」を立てる企業の本社人事部に、果敢に再三電話を入れ、また広島支社を再三訪問して成功した男子学生たち。OB・OGどころか、他学部いや他大学の学生からチャッカリ情報収集をした女子学生たち。このようなヒューマン・ドラマをつぶさに読み進み、独り立ちして行く若者の心を追体験し、姿を想像するチャンスを得られたのも、この二年間の就職委員及び委員長の役得であったともいえる。

売り手市場のため、好評の学生は、早い内定を辞退せざるを得ないケースも多いが、学部の信用及び後輩のために、「きっちりとけじめをつけ、礼を失しないこと」とアドバイスを書き残す学生達の記録は、やはり、この若者たちは信頼に足るのだと明るい希望と安堵の心を誘う。

歴史が浅い学部であるだけに、各人がパイオニア精神にあふれ、やがて暖かいOB・OGに育って行くのであろうが、一方では、同窓会名簿の完成が急がれる。各人が住所・所属部局・電話番号などを常に最新に保つ組織化の一日でも早い完成が望まれる。

# これが編集後記だ！

「飛翔」No40が、見事に完成した。めでたいめでたい。思えば、紆余曲折・波乱万丈の16年間であった。一時は部員数が急激に減り、まさに危急存亡の秋をむかえ、「もはやこれまで」と思った矢先、再び息をふきかえたのであった。「ボランティアじゃねえぞ」という流行語まで生んだ、激動の時代を生きぬいた3年生は、このNo40をもって引退する。3年生の言葉には、飛翔編集に携わったさまざまな思いがあふれている。未来一の希望と、飛翔をしょって立つ気概が満ちている。より良い飛翔、より良い総科を創っていくために、読者の皆様、どうぞこの編集後記に目を通してやっておくんないさいます。

**月** 日の経つのは、ほんとに早いものだなあと思います。人の意向や、姿勢というものも、逆転していくんですね。だれかさんたちには、ほんとうに感謝しています。 63生 小松千尋

(なんだか悟ったようなおことば。諸行無常、もののあはれを感じる。しかし、悟るのはまだ早い。飛翔は前進あるのみなのだ。)

**み** みんなに笑われ続けた飛翔委員という役目もそろそろおわりにちかづいてきました。ふりかえてみれば、“飛翔”も16年目で、ひとつの節目をむかえていたのだなと感じます。総科が変わってゆくにつれ、飛翔も新しく生まれかわる必要があるし、また飛翔はたくさんの方の可能性をのこしていると思います。きっと、キャラクター豊かな後輩たちが、その可能性をふくらませ、みんなに笑われない、役立つ飛翔に替えていってくれることでしょう。総科って何だろ？大学って何者？さぼろうと思えばいくらでも怠惰になれる大学生活って……？などなど、こーんなことをちょっととまってふりかえることができたのは、名誉ある飛翔委員になったおかげだと思っています。 63生 野村幸代

**飛** 翔、それは入学したばかりで何も把握していないまま引きずり込まれてしまった学生や、後に参加した学生(好奇の眼差しで見られることもある)が、「まだやってるの？」と友人に言われつつ編集をしている総科の広報誌です。学務の片隅にひっそりと存在する真っ赤な飛翔箱は、そんな飛翔のpower upのためにこの11月に設置されました。かつてはASAHI DRYの入っていたこの箱を、今度は投書で充たしてやって下さい。 63生 岸本詩子

(うっうっ、飛翔編集委員って、やっぱり笑われていたのね。しかし、「総合科学部」が、「総合科」学部なのか、「総合科学」部なのかという疑問さえ持たず卒業していく人が多い中で、常に、「総合科学部とは何か」「総合科学部はどうあるべきか」を追求できたことは、大きな誇りである。総科に無関心なのは、自分に無関心なのと同じだと思う。「総合科学部って何するところ？」と聞かれて、あなたはちゃんとして説明できますか？)

**結** 構、自分の好きなことばかりやってきたような気がするな。書くことが好きで、とにかく書いていけば幸せな人種だからね。描くのも好きだし。とにかく創りたがりだし。いつか描いた表紙は、顔で笑って心で泣いて……あれは、裏表ぶち抜きで描いたんだよ。だけど、予算の関係とやらで、表に縮小されちゃったのよなあ。それも事後承諾でなあ……「いいですよ」と笑う口許がひそかに引きつってたりなんかしたのさ。うっうっ。

という訳で、私はきっと来年も「飛翔」に首を突っ込んでいようなあ。ねえ、卒業までにもう一度表紙、描かせてくれないかな？ 勿論、裏表ぶち抜いたB4サイズで(今回は白い紙に描きますから～)。

63生 定行美佳

**私**は編集長の中家君から記事の依頼をうけてほんの数日間飛翔の仕事に携わっただけなので、まさか編集委員の皆様方とこのような形で同列に並べて頂けようとは夢にも思ってはおらず、大変おそれおおいこととございます。

このように編集委員の手を離れ、広く総科学生の人々が参加し、飛翔がこれからも歩き続けてゆくことは、なかなか容易なことではありません。しかし、そういう困難に挑戦しようという姿勢が、世の中を動かし、現在の総科を作りあげてきたものと思います。これからの飛翔には、そしてこれからの総科には、ますますそういった人々の力が必要とされてくることは明らかです。飛翔の仕事というのは非常に大変なものかもしれませんが、夢を追う人達の最高の活動の場となるべく、全力を挙げて作り上げてゆきたいものです。これからの飛翔の発展を心からお祈りいたします。

63生 金澤匡晃

(もっともらしい文章だが、へんちくりんである。私は知っている。実はタネ本があり、「飛翔」と「総科」の文字にすりかえただけだということ。

**飛**翔の編集にたずさわって、「こういう人間にはなりたくないな」というような人々にたくさん出会うことができました。この場を借りて改めて感謝したいと思います。

63生 竹内憲司

(さすが、飛翔の火薬庫(飛翔のタバスコともいう)竹内氏である。彼の存在は、良い意味であれ、悪い意味であれ、刺激になった。「オレは言論の自由を貫く」ごもっとも。しかし言論の自由は、個人の尊厳を犯してはならない。彼は本当は、とってもいい人です。)

**ま**ず、こんなごまかいところまで読んでくれてうれしい。さて、今、4月頃なのだろうが、私の今、これを書いている今は、実は12月である。暖冬のきざしがありありとあり、スキーファンの私は非常にやきもきしている。今年の冬はどうなっているのだろう。暖かいと言えば、4月になって暖かいと思うが、私は、この4月に期待するものがある。何かといえば、聴講受付に関することだ。私は語学が全くダメで(そう言えば私は今1年なのだが)1年の前期、外国語特別演習を、みんなが英会話を受講するのをしり目に「こんなのとったら単位はないだろう」と、「英語読解法演習」を受講した。どうにか単位はあった。そして後期もこれを受講しようと思ったのだが、「2セメ開講せず」今さら英会話も取りたくなく、ある無ぼうな考えがヒラメイた。それは3セメ開講のフランス文学特別演習を受講することだ。私は我ながら、この作戦が、どういう結果を招くか、とても楽しみた。いや、もう結果は出てるんだ、もう春なわけだし……。

P.S. 英会話が楽勝科目とはよく聞く。

02生 内田知宏

(えーい私事をダラダラと繰りのべやがって。しかも、英文読解の直訳風の味つけ。これが彼の芸なのだろうか。先輩から一言忠告しておこう。マジメに勉強せえ、マジメに。)

**あ**っという間に過ぎ去った1年。あまりの忙しさに、こんなはずではなかった……と思う毎日。誰かください、暇をください……しくしくしく……。

02生 森野美和

(「何かすることがある」のは、とてもいいこと。することがなくて、死ぬほど退屈なのよりはね。)



**編**集後記を書くようにと言われた。けれど、12月に編集人に加えさせてもらったばかりで、何を書けと言うんだろう。実は、私は、メ切破りの常習犯です。

02生 南場千里

(「行きはよいよい帰りはこわいこわいながらも」飛翔編集は楽しいよ。がんばってくれたまえ。はっはっはっはっはっ……)

**八**一。何で飛翔委員になっちゃったんだろう。そう思い続けた1年間。自分で「私がやります」なんていさんで立候補したくせに、会議の連絡がまいこんでくるたびにためいきをついたものだ。しかし2年になり現飛翔委員長の思惑(?)により、「よし、いっちょやるか」と思ったもののいいかげんな姿勢を突然あらためることもできず今日に至った訳ですが……。こんな私がいうのも何だけれど、飛翔は変わりつつある

とすごく今思う。いろんな事をやれる場だと思うし、まだまだいっぱいいろんな可能性を秘めてる……やっとな最近その事に気がついたのである。そんな「飛翔」をこれからつくっていくのは君だよ。君、うんそこの君さ。さあ、あたしといっしょにがんばってみないかい!

01生 岡村美穂

(「飛翔」は随時、編集委員を募集しております。編集に興味のある方、または、「飛翔を替えられるのは私だけだ」と思っている方、水曜日のPM3:00に社会科学研究室をのぞいてみてください。編集委員があたたかいおもてなしをいたします。(聞くところによるとさあ、飛翔って就職活動に持ってくと結構オイシイみたいよ)

さあ、最後はこの人にシメていただきますよ。)

**入**学最初のガイダンスでの自己紹介で、俺はいつものようにアホな話をして笑いをとったのだ。そのあと「飛翔の委員を決めます」という段になって、さらにアホな俺は、「それは何なんでしょうか?」と質問したのだ。再び目立ってしまったのだ。それで今、俺はこうして編集後記を書いている訳なのだ。人手不足の編集部ではあるが、現在元気の良い人間が集まって楽しくやっているのだ。飛翔は確実におもしろくなりつつあるのだ。なんだかおかしな文体だけど別にいいのだ。「来年もこういう具合に元気のいい人間が来ればな」と思うのだけれど、3年生がぬけると、人材不足は一層深刻になる。しかし、来年は女性編集長のもと、「元気は良いが品のない飛翔」から、「上品な飛翔」になるにちがいない。興味のある人はどんどん参加してほしい。それではみなさん、おつかれさまでした。

63生 中家伸之

**私**は、この人にこそ、心から「ごころうさまでした」と言いたい。首の皮一枚だった飛翔がなんとか生きながらえたのもこの人のおかげである。5年続いた飛翔が、自分達の代で滅びてしまうのは、あまりにも悲しい」と、63生編集委員はみんな思ったものだ。いつかまた、この飛翔に同じような危機が訪れることがあるかもしれない。その時はぜひ、飛翔のバックナンバーをめぐってほしい。「飛翔」という名前にこめられた思いを感じとってほしい。「飛翔」は総合科学部の闘いと、成長の記録なのである。

以上、編集後記にかえて、文責 63生 山崎明子



広報委員

山本 雅 友田 卓爾 森 利一  
安部 剛 小野 光代 間瀬 茂  
武田 隆義 佐藤 博明 楠戸 一彦

事務官

宮原 和男 中道 一博

学生編集委員

中家 伸之 山崎 明子 金澤 匡晃  
岸本 詩子 小松 千尋 定行 美佳  
竹内 憲司 野村 幸代 内田 知宏  
北村 綾乃 南場 千里 森野 美和  
播野 尚子 岡村 美穂

広島大学総合科学部広報委員会

住所：広島市中区東千田町1-1-89

電話 (082) 241-1221 内線2247